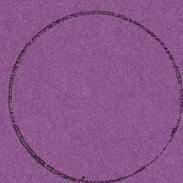


野津原方言集



野津原方言集 続編No.18号

表紙画……………酒井 治郎
題字……………姫野順子

★ ご協力頂いた皆様《故人》

内藤忠人、河野富士人、甲斐英行、和田義人、奈那秀造、
佐藤林治、佐藤真一、秦清、佐藤ミヤ子、工藤清人、
山室寿、杉田信男、林武門、佐藤吉晴、福森要、佐藤富雄、
一華和尚、工藤三助、佐藤昌史。

★ ご協力を頂いた皆様

足立勇、豊東サツキ、波多野テル子、川西哲男、
森英利、田中清子、奈那時子、佐藤フジミ、竹林敬文、
日高興治、沢野雅子、吉野美智子、田中敏子。

★ 利用させて頂いた資料

NHK大分ラジオ放送、郷土史野津原、原村小史、月の歌、
宇曾山物語、歴史記録会資料、文化財調査こぼれ話、
読み語り台本、文化協会放送ナレーション、肥後街道調査会、
世界原色百科大事典。野津原古い歌愛好会。伝承民話調査会、

野津原方言集 続編No.18《通算28》

平成26年吉春発行

野津原方言調査会

はじめに

歴史は常にくり返されています。方言も古い生活用語文化。人が生きている以上は 欠かせない存在でもあります。だから愛され継承されて今日も 明日も使われて行くのです。情愛がそっと込められて本当は 優しいのに発音は厳しい でもふと振り返りかみ締めると じんわり仄かな人の心くぼりが 滲み出るので。だからいつまでも使われる 妙味もあります。

歴史の影で喜怒哀楽の狭間で 泣き笑い怒りつづける方言。だから好かれ愛され 明日に向かって広がって 行くのでしよう『故郷の生活文化』の 代表選手が。

ちょっと(昭和31年頃まじ)を 振り返ってみましょう……世相は…高原景気、ロングヘアー、Xライン、ロックンロール流行。太陽族、クイズ大流行、団地誕生、気象庁発足、テレビ電気洗濯機、冷蔵庫が 爆発的に売れる。が一億総白痴の懸念もあった。リスボンオリンピック開催。

日田彦山線開通、県の財政は6億の赤字、県下で敬老年金が461人に初めて支給。大分空港工事はじまり、芹川第一発電所送電開始、

日ソ漁業条約調印、国連に日本の加盟が可決。スエズで戦争開始、県機構改革で44課が36課に減らされた。県病院新病舎完成。

現在と比較していかがでしょう 随分新しい歴史は歩いていますが これではよかったのか、悪かったのか、さて答えはどうか皆様のご判断に。60年先を描きながら……ご自愛の程を。



みだし……………	1	◎ 民話、伝承	
はじめに……………	2	道は影べら……………	4 1
もくじ……………	3	方言説明……………	4 4
★ 表街道五助物語		◎ 女性の底力	
下話 やがてダム……………	5	千秋と言う名前……………	4 5
上話 里の辻……………	7	やれば出来る……………	4 7
三助井路……………	9	芸の心の奉仕活動……………	4 9
ちよつと里唄……………	1 1	方言説明……………	5 2
方言説明……………	1 3	★ 玉手箱	
★ 故郷の味		昭和合併当時議席……………	5 3
ヒキノベビッチョ……………	1 5	連鎖劇……………	5 5
ダンゴビッチョ……………	1 7	原村組合……………	5 7
こんもでん米粉だんご……………	1 9	恋の七瀬川……………	5 8
方言説明……………	2 0	狹しい石の文化……………	5 9
★ あげなこげな話		方言説明……………	6 0
地主んくれたみやげ餅……………	2 1	★ ちよつと一服	
吉ちゃんの人情話……………	2 3	五助さんの夢……………	6 1
芽ぶき花……………	2 5	方言説明……………	6 2
方言説明……………	2 8	大正と昭和ん初期……………	6 3
◎ 方言子どもん世界		昭和20年頃……………	6 5
冷汗かいた殿様……………	2 9	★ 民話、伝承	
手まり唄にも肥後ん心……………	3 1	荷尾野はぐま……………	6 7
赤飯に添えたナンテン……………	3 3	絵に書いたカニ……………	6 9
往還田は今も大事に……………	3 5	愛宕に迎える義経……………	7 3
◎ 民話、伝承		帰って来た宇曾の鬼……………	7 5
比丘尼堂……………	3 7	方言説明……………	7 6
頼母子講……………	3 8	△ 方言単語	
優しい心に恵みの……………	3 9	『け』⇒項で……………	7 7
		13088語に……………	

△ あげな、こげな話

- 子供列車と伝書鳩… 9 1
- 回想… 9 2
- ひるのいこい放送… 9 3
- 有線放送電話… 9 4
- 工藤三助さん功績… 9 5
- 方言説明… 9 8
- ◎ あとがき… 9 9
- ◎ 伝言板… 1 0 0



肥後街道を野津原かる 今市まじ5回に別けち 五助さんと旅人
人がつれのうち 歩くそん姿に昔と今を 混成したオシャベリじ
載せたのに 続けち表往還街道を 野津原かる温見まじ 旅人
と辿って今回は『下詰かる上詰』まじ 進んじよります。昔ん人
も今ん人たちも やっぱ野津原んしゃ 情がこまやこうじ 人情
があふれようごたる道中。

昔が出たち思うと ヒヨコットこん頃がでたり でん古い面白い
話も時にゃ いいんじゃねえかち 集まった民話やらも入れち
5回続きます。

方言単語も『あ』から始まっち 出来るだけ多くを盛り込んじ
使う言葉を掘りだしちあります。中にゃ方言じゃねえんも ある
かん知れません。また使ってはイケンガエも それに卑下するご
たるんも でん『方言集』ち言う 特異性の冊子じゃき コラエ
テナ。より多くを知ってもらい 先人が大事に生活用語としち
使った文化財んごたる 言葉をいつまでな使うち ホシイモンジ
ャキナ おご免なさい。単語はまだまだ続きますので ご愛読の
程を お願い申し上げます。ありがとうございます。

五助 御道 物語



道下ん桐ん花がポッカリ咲いち そん福よかな香りが旅する人を心 和ませちくるる。広戸を曲がるとここは下詰。一段高うなっち連山が雄姿を見する。真下にダムがやんがち出来 コンクリートン二重橋も沈む。“在所恋しや歩けば三里 山が高うじままならぬ“五助さんがん馬子歌あ いつどこじ聞いてん 哀愁がある。

流れ落つる水う担げち運ぶ 水に不便なここじゃけん 水が命を繋いじくるるだけじゃねえ 風呂も洗たくもみなこれに頼る。じゃき雨が降ったり寒い冬どま どんこんならん苦役じゃが 子どもたちやっばゆうしたもん 学校かる帰るとサッサト 水くみしちよるき そん気になりゃ人間 何でん出来るもんじゃ。

『うっと背が低いな水担ぎしよったき』ち 笑顔じ話す娘は美人じ 母親譲りんシャントコペー。今ん苦勞が大人になっち 役に立つち言うと『ちゃー嬉しい』 無邪気に笑顔を返した。無理にするじゃろうが人間の 宿命はこげな場面にも現るる。坂道を上ると眺めがいい真萱に出る。

美しい彫刻ん庚申様が 地域の人で祭ってある。何を願っちよるんか手を合わせち 唱経する後ろ姿は遍路さんか。60年に一度ん祭りに建つる習わしを護る 人たちん気持ち輝いちよるよう。心は通じち願いは叶えられもする その人たちの日頃ん精進がきっと 帰ってくるものと信じて祈る。

高台に馬頭観音が祭られ そばに蚕の仏も祭られている。昔の馬牛の競り場にあったが 転々と移動したあとこの地に 安置されているのも施主の心に答えた証か。眺望のきくここは不便と思うがお参りが多いのは魅かれるものが 参りたい気持ちにさせる 何かがあるからじゃろう。“あん娘可愛いや姉さんかぶり いつか覚えた馬子歌を“

往還街道に下りちちっと行くと 明治中期んアーチ橋がある。もう知らん人ほうが多い 道が上を通っちょつた頃でん 地区ん人でん滅多に見ない場所。石積みん美しさは隠れち惜しい。側に店屋があっち田んぼじ 昼過ぎまじ働く人たちに ラジオ放送を放送塔に繋いで 『もう昼過ぎたけんど 仕事の区切りなら聞きながら ハリコミヨえ』と 優しい心くばり。歌ん放送を。

そん横を下ると川久保 こんチット奥に『恋の七瀬川』ん 歌生まれた現地がある。目が不自由でん心に聞こえる 優しい思いでが歌詞となり同じ学校の 先生が曲をつけ 同窓生が歌った歌まさに 故郷ソングである。町の故郷祭りで 披露、七瀬馬子歌とともに 町長さんから記念品を頂いた。

この川べりにゃ 鉱泉も湧き出ち 一頃は沸かし湯があっち入る人も多かった。“広戸川久保積み荷が出来りゃ 主の後追いしちみたい ハ七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ “せせらぎが何思つか 小石をよけながら 流れち行く。白ユリが水面に影映す 川の流れは いずくにゆくのやら。

薬屋さんが柳行李に薬をつめち 各家家を回って使った分を納め補充しち次ん家に。地区をまわった後は 常宿に泊まっち夜は話に花が咲く。秘密は厳守し交流の手伝いは 情報の交換もするから 新しい技術も入ってくる。頼まれる種物なども運んでくれ 親戚同様の好誼が続く人も多い。

『こいさここに泊まっち コンダいつ家に帰るんな』『ですね来月になるかな』 相手に合わせた話題を取り揃え 上手に意見を交換する話法は勉強するとか。信頼が商いも継続出来る 信頼の鍵でもあるごたる。顔なじみになって無理も 言われる時もあるがそこは 商売だけに腹は立てない 喧嘩はしない 人の悪口は言わない 商売の違反はしない。遊びはご法度。



“七瀬七谷 朝日を受けて アオよ勇めよ馬子の歌 ハ 七瀬の セセラギ サラサラサラサラ ホイホイホイ” 聞きほれるごたる五助さんが 旅んしと河津原まじ来たごたる。やんがちダムに水が満ちると ここかるん眺めもまた いいもんじゃ。橋う渡りゃ荷尾野に出る。

“宇曾に出ようか 荒木に行こか 四辻峠の 思案顔 ハ七瀬のせせらぎ 小鮎が スイスイ ほしいほしい” 出会い橋を潜った水が軽やかなた音響かせち 川底まじ見ゆるごたる。

崖ん上に糸棚観音が ござちちよる。昔にお告げによちち こん地に招聘されちかる 大事に護られちよつた。眺望ん利く高台は岩石の上 安蘇噴火ん溶岩が固まったんか ちっと西べら下に元は学校もあった分校。そん頃ん運動会にゃ諏訪に 諏訪はここに見物に來ち交流しよつた。

奥ち言う名前は高貴に聞こゆる 家並みが連なり民家や医者もあちち 簡易な宿も店もあつたき 不便な水も知恵を集めち 山から引き湧水もあつた。温見通いん馬車もここらが 中継地点に人々ん行き來が 辻んごたる様相が醸し出されよつた。辻の地藏様の赤い前たれがゆう似合う 長閑な田園地帯の中心地。

北に向かうと湛水に出るが 工藤三助が苦心の末に引いた 井路がここに顔をだしちよる。浮動岩ち言う苦難の場所かる 水が分岐しちここにも流れ 北側一帯が恩恵に下詰まじ行く。奥周辺には小川野かる流れちいた 田んぼ水はアングコンゲに 四散しち吹き上げた水が 観音堂ん周辺まじ潤しよる。

“風邪を引くなち送ちくれた 奥とメグスの辻の道” 。

そん昔ここにゃ刀剣を練る 素晴らしい場所じゃった。近所か
る蹉跎が集まるんか 松炭もがいと出来たき 格好ん工場があっ
たんかん知れん。西に貝殻を伏せたごたる 山がそん朝日を受け
る『貝殻岳』た 上品な山 大昔にゃ低かったんか 海岸ばたじ
貝を食べたそん殻を 捨てたんが山になった。そげな話を聞くと
なんか 夢とロマンもあるなえ。

“送り提灯 足もと照らし 母と峠の 暇乞い ハ七瀬のせせ
らぎ 紅葉が チラホラ ホイホイホイ” 馬子歌に乗せられ
た 旅んしもチツタ覚えたごたる。『五助さん 私も唄っても
よいですか』『いいで 馬を止めようか』『いいえ 歩いている
ほうが 調子がいいです』クスッと笑った五助さん 『こりや
すまんじゃったな』『いいえ スマにゃ泳いで』『…参った』

旅の人でん4. 5日も連れのうち 旅をすりゃーすぐ覚ゆる
馬子歌にゃ土地ん名前が 訛が入った素朴さもあっち 誰でんす
ぐ覚えたし 調子が外れてんそれなりん 味わいもあつたごたる
。お茶をご馳走になり カンカラ餅ん座布団のカンカラが 3枚
盆の上に上手に積まれちよる。ヤッパ京ん修行が生きちよる。

京かるん帰り道じ行きん世話が 帰り道ん連れなないになった。
“久しぶりじゃと 10年前の 客と連れなう 馬子の旅 ハ
七瀬の せせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ”

陽がちっと西に傾いた 『温見まじあと2里ぐれかな』『そう
ですか 早く着きそうですね』『あんたが 足が達者じ話が上手
やっぱ 商売人じゃなァ さすがに』『とんでもございません
五助さんと歩きますから すらすらと歩くんです オオキニ』

五助さんもやっぱ嬉しい 肥後に帰ると番頭さんに そげな姿
に自分がん事んように 嬉しい旅でんあるき 足取りも軽い。

五助さんが『表街道五助旅』じゃ 時代が江戸期やら現在やら
飛んで 現れる現象が見らるるが そかぁ歩を入れちオクレナ。

馬子歌でん聞いちもらおうか ベーぶん高うなった上詰は 七
瀬川んせせらぎも 遥か下んほうにキラキラ光る。ダムが完成す
りゃもう周りん山が湖水に 影う落としち景観も見事デ。

工藤三助が引いた水が 湛水に出たあと分散しながら こっち
にも流れおつる。

三助踊りから 岩を潜ちここまじ来たと
顔を覗かすイジラシサ
三助祭りに揃うた 揃うた
稲ん出穂より ユウ揃うち。

“水ん流れが 涙じくもる 工藤三助 しのぼれち ハ 七瀬の
せせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ”。

小野に水くぼり 糸棚堤にも水ためち 真萱に回るが 糸棚に
ゃ石合かる来ち吹き上げた 水も糸棚ん上んデーラに 水くぼり
田を通ったんが そん堤に入ちくる。チットン水う上手に使い
回す 古くからん生活ん知恵が 生かされた農耕歴史ん 思いや
りでんあるごたる。

ツルベ井戸かる 跳ねツルベじ汲み上げた水 ま夏どまそん喉
越しん美味さは まさに天下逸品。脇にゃ灰アクを取ち それ
じ洗たくをする知恵。苦勞する影にゃ物を大事にする 先人たち
ん巧みな生き方が受け継がれちよる。じゃき例え貧しゅでん 心
は豊かじあったんが 如実に残されちよる。

“あん娘 年頃 姉さんかぶり いつか 覚えた 馬子歌を
ハ 七瀬の せせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ”。

サトイモん葉にたまった 朝ん露はキラキラまるで 水銀の玉
んごたる。七夕様ん短冊に願いを書く そんな時にこん水を硯に
取っち墨をスルト ソリゃいい字がか書くる。願い事も真実な心
の証じゃき 尚更そうあっちほしいんが 人間の心理じゃろう。
旧暦7月7日が『七夕まつり』 奈良時代に中国かる入っち来た
『キコウデン』ち 言う星祭りが 始まりん行事んごたる。

牽牛ち言う牛を使うち 働く青年が仕事しよった。近所じ機織
りするカタ カタち音がする。ヒョイト聞き取れちよつた そんな
機織る娘んショクジョも 気がついち久しぶりに 見るごたる
青年に魅かれちしもった。やんがちイツシカ仲よくなっち 時時
に会うごつなつたそうな。楽しい似合いんカップルでんあつた。

じゃけんど こんだ会う事んじょうに 気持ちが移って働く
そんな気持ちが薄れちシモウタ。そりゅう見た神様は 『こや悪い
こちなつたようじゃ』ち 心配しち二人を呼ぶと コンコンと話
し諭したそうな。『こんままじゃ 二人とも駄目な運命になる』
厳しく話しち聞かせましたら 自分たちも『こんままじゃいけない
い』と そんな教えに従うこちなつた。

暫くは 7月7日に『天の川で会う事を許す』それを 承知し
ちかるは 楽しい生活に戻つたんと。楽しい事にゃ飽かんが 悪い
事はすぐ覚えち困つたコンニャクです。苦勞する事もあるんが
人間 それによつち楽しい嬉しい事も 来るもんです。それかる
ん二人はとてん 幸せに暮らしたち言うんです。

こん日に切つた竹は虫害もねえき 『竹ん切り時』ち 言うち
物干し竿やら盆の墓地ん 花筒なんかも切つたもんです。中国か
る入つた物語じゃが 人間の生き方を教えた話は 聞いていてん
為にもなり実行すりゃ尚 いい事である訳でしょう。しないん
は一生ん恥かも知れんごたる。

大分県行進曲

- | | |
|---|---|
| 1 耶馬の流れの水清く
久住の原の空高く
南蛮船の行き交わし
波路はいずこ豊の国 | 2 昔大友宗麟が
残せし文化花と咲き
世に六聖の名も著しく
千代に輝く自尊の碑 |
| 3 命かしこみ清磨の
遺烈は薫る今もなお
神のみいずは照らすなり
仰げ鎮めの宇佐の宮 | 4 尽きぬ温泉のささやきに
あつき恵みの栄えあり
稔る田畑うるわしく
日に開けゆく12郡 |
| 5 空は晴れたり野に山に
ああ百万のはらからが
躍進の意気朗らかに
歌う我が里豊の国 | 昭和10年大分新聞社が懸賞募集した1等入選歌で当時全国で飛ぶようにレコードが売れたと言う。 |

野津原音頭 (替え歌として作詞されたもの)

- | | | |
|--------------------|-----------------|------------|
| 1 東は胡麻鶴西は詰め サノ西は詰め | 東西三里の野津原村 トサイサイ | 野津原村。 |
| 2 胃腸によく効く冷泉は サノ冷泉は | 湧いて尽きない塚野の地 | トサイサイ塚野の地。 |
| 3 春秋賑わう宇曾山 サノ宇曾山 | 霊験あらたな虫封じ | トサイサイ 虫封じ。 |
| 4 殿様時代の野津原郷 サノ野津原郷 | お茶屋の跡や城の馬場 | トサイサイ城の馬場。 |
| 5 河鹿の声や蜚狩り サノ蜚狩り | 流れも清き七瀬川 | トサイサイ 七瀬川。 |
| 6 秋葉の山の空高く サノ空高く | 功を語る忠魂碑 | トサイサイ 忠魂碑。 |

- 7 広さも富も人口も サノ人口も 郡内一の野津原村 トサイサイ
野津原村。
- 8 郷土を愛せよ村人よ サノ村人よ 家業に精出しそしめよ
トサイサイいそしめよ。

※ 10番までであったようですが 資料が集まりませんでした。

野津原音頭 〈昭和22年に作詞作曲されたものです〉。

- | | |
|--|--|
| <p>1 宇曾群山くれない染めて
霧が匂うよ朝山帰り
可愛いあの娘は誰の花
ソレ野津原よいとこ
ソレ野津原よいとこ
よいやな。</p> | <p>2 七瀬七谷七つの月が
早生を刈る娘の眉びく姿
誰にあげよかこのひと穂
ソレ野津原よいとこ
ソレ野津原よいとこ
よいやな。</p> |
| <p>3 祭りばやしの郷社の森に
何の願かけ晴れ着の浴衣
仇に濡れよか情けに濡れよか
ソレ野津原よいとこ
ソレ野津原よいとこ
よいやな。</p> | <p>青年団員の多かった時代の盆の
踊りなどに 盛んに使われ当時
の仄かなロマンも伺えます。</p> |

鶴崎おどり 〈猿丸太夫〉

- 1 来ませ見せましょう 鶴崎踊り いずれ劣らぬ花ばかり アリ
ャヨイショコリャ ヨイヨイヨイヤ ヨイヤサー。
- 2 咲いた咲いたよ 踊りの花が 里のかおれ香りを染めて咲く ア
リャヨイショコリャ ヨイヨイヨイヤ ヨイヤサー。
- 3 娘島田に 蝶蝶がとまる 止まるはずだよ花じゃもの アリャヨ
イショコリャ ヨイヨイヨイヤ ヨイヤサー。

唄は世に連れち言うが 祝いにゃ手拍子じ唄が出たもんじゃつた。それも戦後になると急に レコードが幅を聞かせ ラジオが普及するともう 晩方どま毎日唄が流れち 若いしゃすぐ覚えたもんじゃ。素人演芸どまあると やくざ踊りが向こうかる 声がかかっちソリャもう 賑やかなもんじやった。

野津原音頭は古いのが 戦前の婦人会が中心の口説き 替え歌じ盆踊りにもゆう踊りよった。新しいなゝ戦後に地元んしが 詩を書き曲もついたら踊りも出来た。猿丸太夫は『鶴崎踊り』じアラヨイショコラン おはやしがもう盆にゃ付きもん。踊りの旨いなゝ嫁に取る…それほずまじ目に留まった。

方言説明《表街道五助道中分》

- 5 P くるる…ただける。やんがち…やがて。かん…そのひとの。どこじ…どこで。てん…でも。じゃき…ですから。どんこんならん…どうにもならない。やっばゆうしたもん…やはりよくしたもの。しちくるる…じてくれる。もんじゃ…ものです。うっと…わたし。しよったき…していたので。シャントコベ…しつかり者。チャー…びっくり。こげな…こんな。
- 6 P ごたる…そのようで。けんど…けれども。ハリコミよる…精出す。あっち…あちら。こいさここに…今晚ここに。コンダ…こんど。
- 7 P やんがち…やがて。まじ…まで。ござちよる…座っています。たんか…たのですか。ちっと…少し。へら…その方に。アンゲコンゲ…あっちこっち。
- 8 P がいと…たくさん。そげな…そんな。ちった…少しは。スマニャ泳げ…潜ることをスムと言うので スマないなら泳げと難問を。2里くれか…約8キロメートル。オオキニ…ありがとう。



- 9 P そかあ…そこは。オクレナ…くださいね。で一ぶん…だいぶん。吹き上げた…サイホン方式に水が来る。デーラ…平坦な場所。チットン…少しも。灰あく…灰に水を通すと灰汁が出て洗たくに利用する。じゃき…ですから。
- 10 P ソリヤイイ…それはよいこと。そうあってんほしいんか…そんなにあるのにまだほしいの。ヒョイト…ふと。やんがち…やがて。じゃけんど…ですけれど。コンダ…今度。シモウタ…しまった。こんままじゃ…このままでは。困ったこんにゃく…困り果てた捨て言葉。物干し竿…洗濯物を干していた長い竿。花筒…墓地に立ててある花筒。
- 11 P 詰…当時の大字上詰の意味。冷泉…胡麻鶴の南奥にある冷泉。虫封じ…子どものカンの虫に霊験あり。お茶屋…殿様の泊まる宿舎《お陣屋とも言う》。※原曲は紅やの娘の替え唄で歌詞は婦人会が作ったようで。盆踊りなどに利用。当時の野津原村内の観光地や 名所を取り込んで10番まである。
- 12 P 郡内……当時は人口が1万人以上あった。農林蚕糸などのほかに水産。荷馬車は約50台あって 産物の輸送に活気があった。七瀬七谷…起伏が多くて西から東に流れた 七瀬川を挟んだ東西に細長い村。朝山帰り…農家の牛馬の餌料の草きりは日課。郷社…野津原神社は郷社。青年団員も多いときは500人を越していた。猿丸太夫…鶴崎で踊る元禄時代からの 京芸能の流れを組む優雅な踊り。

表往還五助街道旅日記 江戸期は同じ肥後領地だった山中、石合周辺の思いで日記。で五助さんと再会しましょう サカシュンチョリヨエ。皆んなにヨロシモウシテナ。

こん後はお楽しみ『故郷ん味に』 ヒキノベが出ちきます。まゝ一般的にゃ『ヤセウマ』じゃが食べ方じ 名前が変わるなんか 心にくい表現じゃが それだけ優しい心くばりゅ しよったんじゃろうなえ。生唾出るごたるわな。

命

『故郷ん味』

ヒキノベ、ヒキマメシ…ヒキち言うんは 引っ張る意味かる付けたんかん知れん。ドッチシテン小麦粉を利用した 百姓にしちみりゃ代用食 米ん食い延ばしん一番手じゃつたゴタル 宝物でんある。古くかる中国かる入ったき 油を使う料理にユウ似合うが 日本に来ると油と一緒に使うんなら アブラゲじゃろう。

精進料理ん『ケンチン汁』にや あぶらが 幅を効かせよったが そりゃ又いずれ出番に待ちもらい こんだは小麦粉ん出番。それも豊後が主戦場ん ヒキノベ、ヒキマメシ、に顔で一ち貰ったんで。夕飯ち言ゃもう『だんご汁』が 定番じそれが時にゃ姿う変え 相棒や味によっち名前も コシャクナ変わるきエエラシイ。

500Gん粉なら 塩が大きさ1つグレガ 適量じゃろう。好みもあるきソカーそれなりん 味加減サジ加減じ そん家ん味にもなるち思うわな。季節やら温度やら難しいこたぁ 抜きにしち作るんも 思わん独特ん味に仕上がるもん。もともとは大けなダンゴ状にそれがイツンナカメーカ 形も味も変化したき面白い。

基本ななんちゅうてん 心込めちコヌル、ミミタブぐれん柔らかさが いいんかなぁ、延ばしち10Cぐれん長さに チギッチャ ヒツツカンゴツ並べち 少し湿らせた布巾をカブセ 20分ほず寝ん寝しなぁえ。そんナカメエ湯を沸かしち シコウスル。湧いた湯にサッキンダンゴを 延ばすと程ゆう延びるき 延ばしち湯にそっと入る。引つつカンゴツ 時々混ぜち入れる。

こんまま入れちしまつと 『ダンゴ汁』コースなるき 『ヤセウマ』なら そっとカキマゼながら 煮えら浮き上がるき そんまま鍋ごとザルに移し変ゆる。さつとウチワ何かじ仰ぎ冷やす。そつとザルん端にかけち広げ冷ましち ここまじん出来上がり。

そげな間にキナコと砂糖を好みに混ぜ合わせ キナコ付きのものも
いいな ヤッパ早めに広げた ダンゴン延ばしたビラに マメスと
付きはいいけど チットベとべとするんが難点。冷めてから付く
るとサラリとした 付きかたじ上品に仕上がる。好みや相手により
けりじゃが 砂糖屋ん前をツージ通った ごたる甘さは考えもん。

『ヤセウマ』は盆の仏様にゃ お供えじ欠かせんもの。お盆に家
に帰っちご馳走になり さて天国にイヌル時ん土産を クビルんが
こんヤセウマが一番 強うじ丈夫ち言われちよる。じゃきウントコ
サ お供えにヤセウマあげるんは 何よりん親孝行 先祖供養とか
言われちよる。

『ヤセウマ』ドウナ 旨かったな。なし『やせうま』ち呼ぶんじ
ゃろうか……昔茶店じ『ヒキノバシ』ち 注文しち待つちよつたら
使いの荒い馬じゃろう 瘦せち背骨がムゲノコサレ ちっと山んご
つなちよる。じっと見ちよる目の前に ヤセウマが運ばれち来た
ら 『みよ 瘦せ馬んごたるのう』 それかるはヤセウマち こ
じゃ呼びよるんと。

片方じゃコネタダンゴを 一つ叩くと茹でたんが 『うしん舌』
ち言うち 砂糖をつけち食べよつた。肉太ん『牛ん舌』に比べち
瘦せた馬ん背中んごたるき 『ヤセウマ』が似合うになった。かん
しれんがいろいろ 諸説あるきメッテンコタ 言われんかんええ。
人も好き好きじゃし 決まったもんでんねえき。

さっきん『ダンゴジル』じゃが こりするんならダンゴ寝かせた
なかめ。イリコだしに旬の野菜 なんでん手当り次第に使う。これ
が経済にも栄養にも 時間の節約にもなったもん。熱い炊きだちも
ウメーシ ヒエタンモ味がある。次ん朝ヌクメタンモ 又おつな味
がそりーも一つ 煮直しちコゲタ味も又妙味。それもネンジュ炊き
よらんと 技術がイルカン知れんきな。



ダンゴ汁んこつう普通は『ダンゴビッチョ』 トン言うがこん『ビッチョ』が ややこしい解釈ん仕方にもなる。『ビッチョ』タァここじ言う『ダンゴ汁』んほかに 『うどん』もビッチョとん言う。すくいあげち食べるきじゃが シヤ 途中じ落とすとビチャと落ちるんが『ビッチョ』になつた。らしい。

人間の優しい気持ちは こげな所にも特に食べ物にゃ 使われちよるごたる。『ビッチョ』つまり『うどん』も 前述んごたる調合じこねち寝かする。がこねた後は丸くしち 布巾風呂敷じ包んじ 子供に踏ませたもんじゃ。子供ん重さじ10分あまり そん後チット寝せちよいち こんだは平てえ『延べ板』じ 何回もアンゲコンゲしち延ばす。

1Cか2Cぐれになったら 適当に折りまげち粉をふりかけ片隅かる上手に切っち進む。サクサク包丁とんコンビ~~ネ~~ーションに 真新しいウドンが見事に出来た。粉をふりかけ引つつきアワソツスルト ちょいと休ませち沸かした湯に サツト茹であげち見事『うどん』一丁あがり。『ビッチョ出来た』 こちなる。

これには技術が必要じゃが 自家用なら多少の不出来でん そん味は又格別でんある。子供も加勢する食生活は 自然と食感謝の気持ちも寛容さるるもん。夏の取り込み 汗にまみれた農作業の厳しさ 回想するとき生きて行く 食べるものへの感謝は 自然と備わっち行くんじゃろう。

こんだ『落としだんご』ん番じゃが こりゃ又簡単明瞭なもんじ 具財を入れた準備ん鍋に 少し固めに解いた小麦粉を 杓子じ一口大にすくちち入るるもん。多少ん大小や変形なんか お構いなしん無手勝流儀 煮え立ったら味噌味をつける。いりこだしと旬の野菜がゆう調和しち トロリ気味が風味も引き立てち 喉通過は素朴な味をもららしちくるる。

『だんご汁』にビッチョを入れる時 豊後独特ん手法に二つに裂いちいるる。よそじゃチョト真似は難しい 裂く事じ舌障りん濃淡が出来 歯ごたえにも感触が濃厚になる。厚みの差や太さの見た目 食にたいする繊細な人間の心理が 生かされた独特な食べ方かん知れない。

『ひきまめし』は 茹でてあげたらすぐ きなこにまぶして食べる。茹でたらすぐ引き上げち 生醤油味じ食べる『カマアゲ方法』なんかも 食通な食べ方じゃろう。粉の種類によっち白くない粉の使い方 挽き方が粗雑で見かけが悪い そげな素材の使い方に苦労した 生活ん知恵かんわからんが。

餅状にちぎった粉を平たくして 茹でた『ゆでもち』にゃ少し砂糖を 振りかけるとすぐ解けち 甘みが包んでくれるき 時間のない時ん急ごしらえには 格好ん餅になっちくるる。こねたままチギッテ茹でたのに きなこをまぶすと香りが 豊かなおやつに早変わり。

小麦粉の利用価値はこげなふうに 広がったが元を正せば 食を大事に感謝しち使う優しい 思いやりん美風が隠されちよる。それを子供ん時かる体験 手伝う機会に覚える好奇心 仄かな夢形に現してみたい 思いのこもる生活ん中じ 成長する人類の歴史は時とともに 継承されちよるのじゃろう。

そうしちみると米ん食い延ばし だけじゃねえ食文化ん発展ぬ自分じ 試しちよるんかん知れん。物を大事にしち味ん究極を探り当つるなんかロマンがあっち 頼もしい人生でんある。若い人たちんやる気もたらず 目新しい食べ物も そこにゃ先人が大事に 守り育てちくれた鍵でん あったごたるが。香り仄かなきなこが姿を変えた 元の大豆は人間には絶対に 欠かせぬ存在品じあり使い方 まだまだ広まりそう。



『コンモデン米ん粉ダンゴ』

『ジャトット忘れよった あぶね怒らるるところじゃつた』 それもそんはず ヤセウマ ヒキマメシにゃ米ん粉ダンゴは 切離されん仲良じゃつたき。付け加えちよくき。小麦粉ん色白な女性んごたるに 米ん粉ダンゴはチット男性的な 味スタイルになる。粘りは強く対照的じ うまい具合に調和が取るる。水なら少し固く湯なら柔らこっ仕上がる。き そげなテクニックもな。

農家じゃ米すりん後に チンメー米粒が残るもん。洗っち干し粉にしち餅についたり ダンゴにするが きなこまめしん ヤセウマ、ヒキマメシにゃゆう似合い 盆のお供えにゃ格好がゆう 女性美と男性肌が調和もする。こんダンゴに餡を塗ると アンコロ。味噌を塗りコンガリ焼くデンカク。と又格別ん味が楽しめる。

だんご汁に合わせち入ると 口当たりが幾重にも楽しめる。米すりん時ん米選機下に落ち 捨てられるかち思うた くず米も見直さるるもんじゃき 小さくてん力量にゃ負けんしを 『こんもでんコメンダンゴ』ち表現しよった。見かけによらんき めって見た目じ感じたてん 真実は違う例えじゃろう。

夏場はキナコは涼しく感じるち 言うようじゃき季節に合わせ 食生活に取り入れたんも 理屈に合うんじゃあるめ一か。生きちく生活上手ん食い物を 先人たちが理屈と知恵を 組み合わせた食べもんがあるき 今日もサカシユ生きちよるる。太陽、空気、水、そしち周りん人たち、心ん支えあいによっち 元気なえ。

『コイサうどんを打つえ』 じゃなゝ これも小麦粉じゃき仲間じゃなえ。ふんとやっぱ皆んな助けおうち じゃきサカシインじゃろうなゝ 心が豊かじゃもん 有意義にすごさんと 勿体ねえわなゝ。15 p⇒19 pの方言説明は次にあります。

方言説明

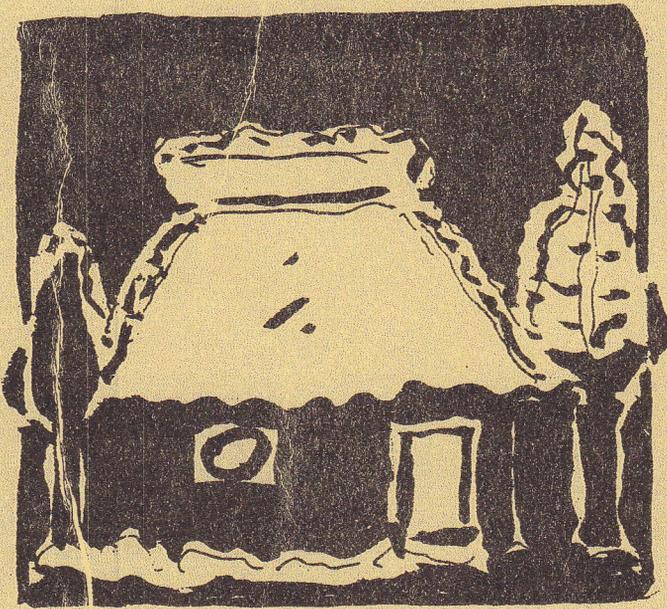
- 15 P ドッチシテン…いずれにしても。ゴタル『ようです。こんだ…次は。コシャクナ…横着な。エエラシイ…可愛いらしい。グレガくらいが。ソカー…そこは。イツンナカメーカ…いつの間にか。チギッチャ…もぎとって、引っ張って切る。ヒツツカンデ…うまく捕まえて。シコースル…準備をする。サッキ…先ほど。カキマデ…かきまわす。
- 16 P やっぱ…やはり。チット…少し。クビル…束ねる。イヌル…帰る。ウントコサ…たくさんな。ドウナ…どうですか。ムゲノコサレ…可愛いそうに。メッテンコツ…めったな事を。ウメージ…おいしくて。ネンジュ…いつも。イルカン…必要かも。
- 17 P トン…とも。シャ…うっかり、本気じゃない。アンゴケンゲ…あちらにこちらに。
- 18 P ねえ…ない。
- 19 P ジャ トット…そうでした、うっかりと。あぶね…预期せずに。チンメー…ちいさい。入ると…中に入れると。米選機…方言で…ベンセンキシタと言う。もんじゃき…ものですから。めって…めったに。あるめーか…じゃないでしょうか。サカシュ…健康で元気に。コイサ…今晚は夕餉は。ふんと…本当に。

機械から漏れるように落ちた 小米でも使い方では貴重品の仲間にも それでも無理なら牛馬の餌や 鶏のえさにもなる。最大限に有効に生かすのも 折角育った産物の命を 大事にする証なのです。だから食べる時に『頂きます』と 言うのです。感謝の念で。



五助口

南
東
西
北
南
東
西
北



『地主のくれた土産餅』

今年も取り入れが終わっち 粃干しが始まった。地主の家じゃ一足先に臼じイタもち米が 美しい餅になっち土産ん 風呂敷に包んじゃる。小作人が皆んなヨバレチ集まる 秋ん一夜は優しい地主ん心くばりん慰労会。日ごろ田んぼを作っちくるる百姓に 気持ちを現す恒例ん一時でんあった。

『さぁさぁ何もないけんど』と 地主に迎えられる考えられないゴタル 夜は田んぼを作る人の 心を大事にする奇特的な行事。農地は作る人があっちこす 生かされもするし作物も いい出来を約束してもくれるもん。『今年は暑うじ水も少うじ ヒドカッタナァ』招かれた長老は『お影じ米も何とか出来ち いのちきも出来ち 年も越せます』 皆んなが一斉に頭をさげた。

『いえいえ 皆さんが一生懸命 汗水流しち働いちくるるき 田んぼも喜んじますよ』『勿体ないことです』『それにうちん田んぼは日本一美しいち 皆んなが羨ましがられぢいます』 百姓はもう感激しち涙を 拭くしもあったごたる。『米ん取れがチット少ねえかな そん分は何とか考えますからな』

来年も頑張っておねがいしますと 言い出しそうな言葉を取るよっに 若い人たちが 『来年も又作らせてください』と 小声で言う と 『それはもう 皆さんに是非続けて お願いしたいのです』地主さんは緊張しちよる 小作の百姓に 労する感謝の『ご馳走あれこれ』を 勧めて『心ばかりの料理ですが ゆっくり食べたり飲んだりしておくれ』

笑顔じあいさつした後は みんな無礼講で折角ん お招き喜んじ過ごした。地主たぁ農地を持っちよる家。小作人は農地は買えないから 借りて作る代わりに『小作料』を支払うわけ。

じゃが大雨やら日照りん年にゃ 米ん出来も悪うじ『小作米』ん納めも 出来ん年ジャツチアル。地主も貰う事じ生活が守らるる。『麦でん代わりにいいで』と。百姓は自分たちは麦、粟、ヒエでん食い繋げるる。そげな地主ん多い中でん こげんふうに小作人をでーじシヨットンです。苦勞分かち合う思いやりがあっち。

だから小作人も田んぼを大事に守り 米を出来るだけヨキィ作っち。お返ししたり 畦草は美しゅ切っち牛飼い そんな肥やしを田や畑に入れる。そこに『やる気』が生まれ 苦勞を感じ取る。人ん心ん行き来する美風が いつんなかめーか育っち 秋ん夜の楽しい一時になったんじゃろう。日本一美しいな心かん知れん。

夜も更けち米造りん苦勞も 忘れらるる一時が流れた。家で待つ家族もやっぱ暑さに 頑張った者同志じゃき そろそろ家が気になりでーたんか そわそわが目立ちでーた。『そろそろお暇にしゅうかな』『まゝいいじゃねえ』 程度がある人の甘えは 心得たもんじゃき長老が 『ご馳走になっちしもうち』と。

親が子が年寄りが待つわが家 もう辻んワカサレまじ来ちよる提灯の明かり。そんな明かりがこんだは。嬉しい土産といつしよに仄かに 暖かく輝いた。『今帰ったで ほらおみやげ地主さんからで』 親が渡すと弟に 次々に渡しち歓声があがる 夜道にゃ笑顔と人ん情けの土産餅。

ばばさんにも母親にも妹にも 早く見せたい『土産餅』ん包みが 次々と笑顔じ渡され しまいにゃコンメー子が ウダキモウサンゴツ抱えち 小走りにわが家に急ぐ。月ん光に影がいくつも細道に 移し出された『お接待の夜』は 目が冴えていつまでん寝つきさうにねえごたる。

これが人の情けじあり 真心んご褒美でんあるんじゃろう。さゝライシンもハリコムカナ。



吉ちゃんの人情物語

『おんのう』 玄関口かる声がシタチ思うたら もう上がり口かる 笑顔ん髭面がゆう似合う そんな吉ちゃんが来た。『ありゃ今日は早えなあ ドコ行くきな』『こき一來たんじゃ 悪いな』『またトツボ言う』 大笑いするはず コンシが来るともう 明りい恵比須様んご入場んごたる。

『山芋掘ったき ヨダキカロウガ食いなあ』『りゃーそりゃまあ悪いなあ』『悪いこたねーき ココマジ来たんじゃこと』 まるで掛け合い漫才んごたる二人。男が男に惚れるたあ こんことじゃろう。いつ見てん笑顔が似合う そり一人かる何事でん頼まれてん『いや』た言わんき いちべ好かるる。

それがまた何でんシキル 器用貧乏ち言うがヒョイトスリャ それが当てはまるごたる。農家じゃき農業かる林業 水道工事、電気工事 左官、鉄筋工事 大工ん真似事 踊り民謡芝居 なんでんゴザレと来るき セク時あ『ちよいと加勢しちくれん』『いいで』自分かたん仕事あホタッチョツテン 飛うじ行く。

『こんだこげな行事があるが どげえな』『あぁいいで』 二つ返事じ引き受けちくるる。頼りん綱にもなるし 時の間に会うもんじゃき ふんと助かる。そんなかわり皆んなも 忙しそうな時にゃ手を出すき 『あっか あげ一雇うちまあ 大事じゃろうなあ』ち見たしが心配するけんど 世話ねえ手弁当じ手戻し。

『こん頃ナジレチョルデ』 話を聞いた近所んシタチガ 加勢に押しかけた。『すまんえ 明日シコシチョコクキ 朝来ちくるる』皆んなは手をそろえち 次ん朝行くともうジャブジャブ 田の中をカキ回しよるもんじゃき 『ショワァネエンナ』『うん おおきにちよいと休憩しただけで』

『こんだ国東巡拝があるが…』『行くこちしちよつて』これじゃもう話もしかと聞かんじ。そんくれお互い気持ちもわかり会うんか知れん。舞台に出てん怖じ気もねえ かと言うち影ん仕事も弁えち 動きは早えし機転が効くき 役立つ機械んごたる。踊りどげえなち 水向けたら『誰からん話な』『会長かるじゃが 気の毒ち心配しよるき』『あんしにゃ世話になるきなえ いいとん』

覚えも早えし即興もドリブリも お手のもんじピンち言うと カンち答えるまさに貴重品。入院したき覗くと『もう嗅ぎ着けち ふんと油断も隙もありゃせん』『だまっち来るなんかオロイイナ』『しもうた もう明日帰るきな』『まゝいっとき養生しなりー』こげん所いおると 死んじしまうがえ』

強気も過信もほどほどがいい。無理が重なると治るにも 時間がかかる。それも本人は痛いはず 知っていたじゃろうが。こんだ又『美しい方に行くかん知れんき』強気が変貌するなゝ やっぱ心ん動揺もあつたんじゃろう。が専門医なら『治る』と 信じて送る朝ん笑顔にゃチット 寂しい面影も隠されちよつた。

国東巡拝途中じ抜けた寺も 何か所かデン後じその分だけを 又巡拝し最後の『満願』には 居合わせた住職が懇ろに祈願も。希望の33寺は 宇佐神宮も含めて無事満願もした。帰路笑顔に唄うのは得意な『めんこい仔馬』そして『諏訪りんどろ』の舞台歌。心おきなく合唱した時 人の巡り合わせん不思議な人生も。

『吉ちゃんよい田植えはどげえか』 向山かるオラビヨル。『モウスダ』 カンタンニ言う声に 折角加勢しちやろうち 思うた気持ち揺らいだが 相手に迷惑かけとねえ それが何とん齒がいち怒つた。けんどもそれ本心じゃねえ ドウクリ言葉ん綾でんあろう。苦勞承知に生きた吉ちゃん 本当は恵まれちをるんじゃろうが 立場本人の個性を思うとき それも『幸せ人生』かん知れん。



『里の芽ふき花』

肥後の糸屋の番頭さんが 京に見習いに登る時じゃつた。街道を肥後かる久住…今市…野津原に向けて歩く もう4日目になっちゃった。今市じ一休みしたあと 帰りの五助さんと連れのうち。途中まじ来た時じゃつた 疲れもあつたんか俄かな腹痛に 苦しむよう連れのうち五助さんも そこが人情もろいき 馬に乗せち野津原まじ下ると 自分がん家まじ連れくうだ。

連れ会うたのん何かの 縁じゃろうきコイサうちに『泊まっちゃう治るなら 明日また京に向かいい』と 帰り着いた。留守番ぬしちよつた 孫娘ん おみつに コゲナコトジち 話すと お粥を炊かせち 『ちつとでん食べたがヨカロウデ』ち 勧めたらチツタオチチータンカ 若えだけに何とか お粥を食べられたごたる。

次ん朝はドウヤラ元気になったき 弁当も持たせち見送った。空は天気んごたるき 鶴崎まじゃ6里はずゆっくり、歩いてん用心すりゃ こんだ船じチツタ寝ちよらるるき。おみつも年頃じそれなりん 気づかいしち送りで一た。京まじゃ船とあたゝ 歩いてんもう知れた距離じゃき 無事に着くじゃろう。

そしち3年間の見習い……無事終わったことじゃろう。何の便りもねえけんど 便りないんはサカシイ証拠。おみつも もう忘れかけちよつた昼過ぎに 立派な身なりん若者が 立ち寄っち来た。何とあん時ん糸屋ん番頭さんじゃつた。『ご免やす 五助さんご在宅でしょうか』 言葉尻には訛もあるが 京都弁が身にちいちよる。

『はい 五助はうちですが』『これは あの時のお嬢さんで』『あのどちらの』『申し遅れました 3年前にお世話になった肥後の糸屋の番頭です』『あっ。あの時の番頭さん』 3年間はあつと過ぎたもんの 娘心には仄かに残っている。

『まゝお上がりください 父もヤンガチ帰りますき』 どけしゅうか迷う おみつ。『じゃここで失礼申します』と 縁先に腰をかけて荷物を開き始めた。おみつは急いで 『お茶でもひとつどうぞ』 さしだすお盆の上には コイサ五助の酒の肴ん ツキアゲが手塩皿に盛られちよる。

『あら 造作をおかけ申します 皆さんお元気でしょうか』
『はい なんとかサカシュしちよります』 『これ あの節には大変お世話になりましたまゝ なんの便りもせずに 申しわけございませんでした』 つつみを差し出すと 京都らしい香りが鼻に漂う。まさに都会の生活文化じゃろう。

『勿体ないです ヤンガチ 父も帰りますので休息しててください』 途切れ途切れに ここまで言うと隣に走った。隣のおぼんは世話役じ 母親んごつ面倒しちくるるき 『こげこげ』ち話したところ 『今晚な泊まっちもらうち 五助さんなまゝ帰らんのかえ 今日に限っちどっか寄っちよるんかなあ』

隣近所も大騒ぎになった。ヒョラット帰った五助は すぐ解ったごたるがそこは 知らぬふりはヤッパ馬子らしい。『そうじゃったかなあ それは長い間ご苦労様じゃつたなあ まゝコイサは又泊まっちゆっくり 京ん話も聞かせちよくれ』 『それが迎えがもう 久住まじ来ちよるもんで。肥後が近くなつたきか 訛がもうチットじゃが出た。』

『とったん お土産もらったんで』 『なにやそりゃまゝー そげな心配せんでんいいに』 『本当にあの時は お陰で無事に修行もよい成績で終わりました』 『そりゃーよかった いやアンタナラもうショワネエチ 思いよつたんが当たつたなあ』 嬉しいそんな言葉はたとえ 上手であつてん帰り土産に どんくれ重みがつくか。



折角じゃがなあ 久住まじ迎えに来ちよるんなら 無理に引き止めもなるめえ。『ほんな久住まじ乗せち行くわな』『いえそれは勿体ないです』『いいゃ 泊まん罰じゃき そりゃ嘘でなあんたん優しい気持ちに わたしたちが『お祝する』 迎えの人もヒョイトスリゃ もう温見まじぐれは チャント来ちよるじゃろうよ それが人情と言うもんです』

遠慮する肥後の糸屋の番頭を 馬に乗せち 本人が歩く希望ん場所はあるいち 温見ん手前まじ来たら馬が留まった。『番頭さん……………』 遥かかなたからん声 五助さんの感どおり 迎えの店のひとたちが来ている。『な やっぱじゃろう あんたの人から お店ん主人の心くばり もう手に取るごたるなあ』。

迎えの人たちも 馬で送ってくれたこん有様に 五助さんと言ひ番頭さんと言ひ 自分たちんよい先輩が いかに素晴らしいかが 目の前に浮き彫りされよった。その間に隣んばばさんと 貰った京みやげの包みを開けると なんと~~帯~~の帯と長襦袢が 輝くごつ目にマバイイまでに。

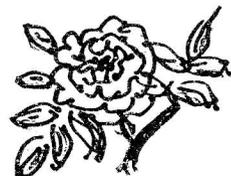
そしち一時した頃にお店ん主と 番頭さんが改めちお礼に来るのは 又いずれの物語に。

方言舞台劇 『芽ぶき花』 1 心揺らしたあの人と
添えぬ仲とは知りながら
過ぎる月日が恨めしく
今宵も濡らす夢枕

2 加茂の身に染む水よりも 3 巡り合わせは故郷の
深い情けを受けてきた 待てば仄かな芽ぶき花
親娘無事かと合わす手に 耐えた運命にこみあげる
照らす夜更けの月明かり 瀬音嬉しや七瀬川。

方言説明

- 2 1 P チータ…ついた。ヨバレチ…ご馳走になり。くるる…頂ける。ゴタル…ようで。ヒドカッタ…疲れた。いのちき…生活。チット…少し。おくれ…ください。
- 2 2 P しちある…してある。ヨキイ…たくさん。りでーたんか…なりだしたのか。ワカサレ…分岐点。しまいにゃ…終わりには。コンメー…小さい。エダキモウサン…両手で抱いてもまだ。ライシン…来年は。ハリコムカナ…精出すかな。、、
- 2 3 P おんのう…いますか。コンシ…この人。ヨダキカロウガ…気が進まない辛いだろうが。いちべ…一層。シキル…出来ます。ヒヨイトスリヤ…もしかすれば。ホタッチョツテン…そのままにしておいても。ナジレチヨル…体調が悪いようで。しゅわねーんな…大丈夫ですか。
- 2 4 P あんし…あの人。オロイイナ…欲張り悪知恵で。デン…でも。オラビヨル…叫んでいる。モウスンダ…済みましたよ。ドウクリ…冗談だよ。
- 2 5 P 自分かて…自分の家に。こげなことじ…こんな事で。オチチータンカ…安心したのか。ドウヤラ…やっとの。チッタ…少しは。サカシイ…元気で。
- 2 6 P やんがち…間もなく。コイサ…今晚。ツキアゲ…天ぶら。サカシュ…元気で。ヒヨラット…急に。チット…少し。とったん…父親。アンタナラ…あなたならば。ショワネエ…大丈夫。
- 2 7 P よいとすりゃ…もしかすれば。チャント…きちんと。やっぱじゃろう…やはりそうでしょう。マバイイ…眩しくて。



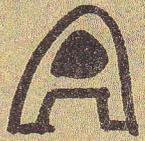
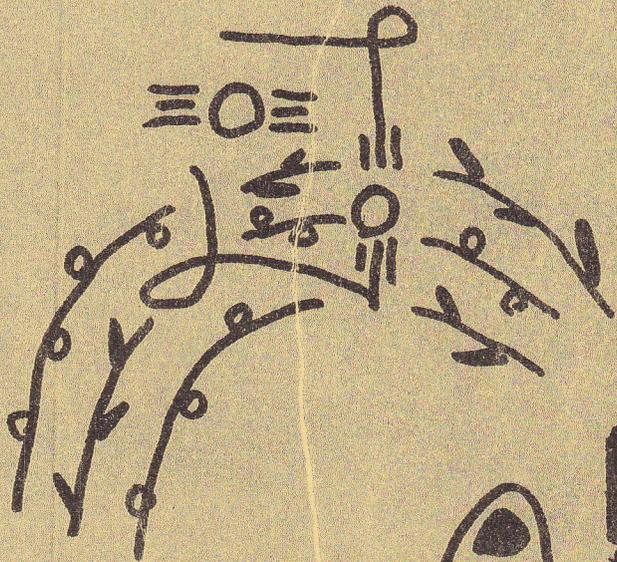
為 會 子

俠



世

恩



『冷汗かいた お殿様』

殿様行列がヨコドウに さしかかった時じゃった。あんまり景色が美しいから 供の係が駕籠を止めさせた。『殿 景色があまりにも綺麗ですので』と 案内をした。その時じゃった。僧なのに行列んシカモ駕籠かつぎ それがチット腹の虫にも納まらんじ。相手に合図すると片方の棒を くるりっと回すと 赤岩の上に飛び出るごたる 格好じ担いだ一華和尚。タバコ一服吹かしだした。

殿様は言われるままにヒョイト 駕籠の窓を開けて外を見た。何と下を眺むると谷底から 吹き上がる風は涼しいが 谷の深さにもうタマガッテチしもった。そんな様子を見れば 『眺めがよいでしょう』と 澄まし顔。お供がそれを見て 顔を真っ青にすると 駕籠かきん 一華和尚を怒りました。

『これこれ あぶないじゃないか』『……………』『早く駕籠をこっちに据えて』『もう眺めたんじゃな 折角ゆう見ゆるち思うたに』 駕籠を降ろしたき お供が側によって話かけたら 殿様がこれは なにか意味がありそうじゃと 察知すると『これこれ』 お供は 畏まって殿様の駕籠に寄りつきました。

『ただごとじゃないな あの者に聞きたい』と 話しました。こんな所ではとお願いして 次の宿で聞くことにしたんと。揺られながら殿様もタマガリハ したもんのよくよくん 訳もあじょうが 景色を見せてくれた 心配りも嬉しくもあつたごたる。それにしてんタイシタ力持ちじゃと 領民の中には素晴らしい 人がいると 嬉しくもなつたんと。

宿に着くとその理由を聞くと 行列の供に僧や神官は免除になつちよるはず それが駕籠かきとは どげなもんですか。問いつめられた お供の侍も手落ちのあつた事を 申しわけないち詫びたそうな。『解ればいいんよヨダキインジャネエンデ』

殿様も又一つ勉強になったと 世間の生き方に知らぬ事の多い自分を恥じたそう。僧は暇な時ならお供だって 当たり前前の務めじゃけど いつ何時用事が出来るかも知れん。そんな時い今出かけちオランキ そげな理由が通るち思う。相手にゃ一刻も早くお経をあげんと それが解る。代わりは出来ん。

涙流さんばっかりに話す 和尚の説教にはお供の係も それこそ頭を畳に擦りつけち 謝ったそう。『いんげそげ一謝られてん困るが』と 決まりやっぱ守っち みんなじお帰り道中ん お供するんが殿様も喜ぶんじゃねえ。宿場ん係ん手違いじ頼んだらしい事じ とんでもない事になったらしい。

それにしてん力持ちん和尚 それに頓知もあつたき ある時に寺の屋根葺き替え普請に 竹がいるごつなつた。門徒しの家『すまんが竹を一荷くれまいか』『いいで なんぼでん切つて使つて』と 嬉しい返事をしちくれた。早速次の朝早く山にはいると そこらじゅうん竹を 切り倒しち大きな束にした。

普通一荷ち言うときせいぜい 10本もくびりゃ大けな束。じゃが一華和尚ん力は そりゃもうチョツケマツケじゃねえ 大けな束になつち夜も明けん 薄くらい人の通らん頃に ヒッカルウトさっさと運びよつた。気がついち山を見るとなんと そこらじゅうん竹は見事に 切られちよつたもんじゃき さすがん門徒しも『サスガじゃのう』と 苦笑いしたそう。

人気がようで働き者じ 言う事が正しいから 人に好かれち長い間人の世話もユウシタそう。決まりをみんなが守る事じ世の中は みんなが幸せになると思うが。肥後の殿様も人に頼む事の 難しさを改めち勉強したと こげな素晴らしい領民のおる 自分の国に誇りをもつちようたそう。



手まり唄にも優しい心

野津原は昔ん江戸時代は 肥後熊本領地じゃった。そん殿様は加藤清正ち言うとてん 侍らしい顔をしちよつたが 心は優しく頭がよかったから 皆んなもよく言いつけを 守り頑張ったので栄えた国に なちよつた。肥後領地になると 役人も来たけど威張るのでなく 地元の偉いひとたちと ゆう話しながら生活の世話を しちくれたもんじゃき 今でん気持ちを受け継がれ 祭りも夏には賑やかに 勇ましくしているんで。

そげな中に子どもたちが歌う 童歌に『あんたかたどこさ』ち言う あそび歌が今でん唄いつがれ それは縄跳びでん 毬つきでん使わるる唄じゃき 子どもだけじゃねえ 大人も年寄りもほーらゆう唄いよった。 『あんたかた どこさ』『肥後さ』『肥後どこさ』『熊本さ』『熊本どこさ』『せんばさ』『せんばやまには 狸がおってさ』『それを獵師が アミチャで撃つてサ』『見てさ』『食ってさ』『うまさのさっさ』

肥後のどこかと聞かれて 楽しい遊びにしたいんで 声かけ唄にすると 相手ものってくるき 楽しくなるんで。狸がおるんも可愛いじゃねえ……アミチャで撃つのは 可愛いそうじゃがここで言う撃つなァ ちよつと苛めたんで。解らないけど見たと返すと 話が續くから それなら食うた と又返した。

ここまで来るともう仕方ないき 『うまかった』と 得意になる訳じゃった。両方から引っぱったゴム くるくる回しながら中を潜って飛び跳ねる。『あんたかた どこさ』『肥後さ』 調子が違う唄い方じゃき 足がからまったり ゴムの調子が悪いと越せない 飛べないき 罰になちしまう。

ありゃーしもった『う
つとうが負けじゃなァ』『惜しかったなァ 変わるで こっち』

『あんたウマイキ早う回してんいい』『ちゃー悪いがえ』顔見
合わせち笑うと ちっと早う回しちみたら お茶の子サイサイと
跳びはねち潜った。『うまいもんじゃな』 呆れち見つめちよつ
たら 手元が乱れたんか 次んしが飛ぶ時にゃ 足がひっかかった
もんじゃき 泣きで一ちしもった。

『ご免な』『シャじゃき コラエヨエ』遊びがハプニングに
なると喧嘩にも。じゃが仲良しになりゃ 又別問題じ笑いじ 時は
流れちしもった。肥後の童歌が唄われると 肥後からん旅人たちも
旅んダリも いっぺんにのうなっちしまごたる。大事に唄われる
そん 優しい心くばりは お互いん幸せな生活にも 役立つようじ
ゃった。

夏の祭りは『清正公まつり』ち言う。清正は親子じ25年はずん
殿様。後は細川公が殿様になったが ほんの25年間に受けた 人
ん心の優しさや生活を 豊かにしてくれたご恩は 300年以上も
過ぎた今でん ちゃんと守られち そん感謝の祭りを毎年繰り返し
ちよる。

盆の後の祭りだけに 盆休みにゃ帰らんでん 祭りに帰る人たち
も多いんも 清正に魅かれる何かがある。そげな気もするんです。
後に続いた細川の殿様も 着任した時に『清正公の領地を これか
ら預かりました』と 心配しないように報告して 受け継いだと言
う心も 地元の人たちがいかに 先代から受けた心の宝物を 大事
にしているかを見取った からじゃろう。これも偉い事です。

皆んなが話し合うことじ 難問も解けるし新しい考えも 浮かん
で世の中が ますますよくなる薬なんじゃろう。人が生きる為に人
の役にたち 受けたその人が又世話をする。そこに素晴らしい唄も
あり 唄う人も楽しく唄うから 笑顔も広がって行くのじゃろう。
『あんたかたどこさ』『野津原』『じゃな』



赤飯に添えたナンテンの葉

『おご免オルカエ』『あーい』奥から手を拭きながら ばばさんが出ち来た。『あらー早えな 何事な』『うん孫が生まれき お祝ん印 皆んなじ祝うちクンナァ』『そうな ソリヤマァ おめでとうございます どっちもサカシイ』『お陰じ元気で』『そりゃ まあよかった まあ上がって お茶さすき』『もうそげな 世話いいんで』

朝のお祝の そげなはなしが 玄関先じあると明るい 一日が嬉しい日にもなる。折角いただいた お祝の赤飯を 奥に移しに行き お茶をお盆に乗せち 笑顔がもうコボレヨル 『あんまり大きな腹じゃ なかったごたるに』『そうで でん丸々太った 色白ん赤ちゃん』『あんでえ似たんじゃな』『ちやゝら ほんとじゃろうか』二人は大笑いするんも 嬉しい事がありゃこす。

お茶を飲みよるナカメ 赤飯を移し 洗うと奇麗に拭き上げち 白紙を 一枚そっと中に入れち ていねいに風呂敷をかぶせた。添えられたナンテンは 『気をつけてありますが もし食べて腹痛を起こしたら このナンテンを煎じて飲んでください』と 言う心くばりじゃつた。

お返しに白紙を入れたのは 何事もなく美味しく 頂きましたと言うお礼のお返しの事じゃつた。人に物を送る時にも 相手の事まで考えて渡す お返しの時にも相手の 気持ちに対する心の現れを示した 世間の生き方が お祝の赤飯を通じて 交わされる人間の生きる 心の情愛なのでした。

『おご馳走になりますき 皆さんによろしく言うて 赤ちゃんが達者に大きくなること お祈りしています』『おおきに お茶まで頂きありがとうございました』



ナンテンにゃ昔かる 毒消しち言うごつ薬ん役目もする。自然の仕組み 人間にも自助努力による 病気に対しち予防する役割を果たす 力を持っておるごたる。怪我して血が滲むが 少しの血ならヤンガチすりゃ 固まっち血の流るるのを 止めちくるる。風邪引きそうな時に 早めに用心すりゃ自分の力じ ひどくなる前に治る事も多い。

ナンテンをよく便所の脇に 植えてあるがそれも 夜中に便所に行き急に倒れた時 それにツカマッチ 大事にならんごつする用心の 為に植えてあるから たまたま運よく大事にならない。そんな時に『難を転じた』ので ナンテンと言うにはピッタリで。人は一人じゃ弱い人間じゃが 多くの人や物に世話になっちこす 生きちょらるるもん。じゃき元気な時に気をつけながら 人の為に来る事はする。それがいいのではるまいか。

旅の僧が遍路しながら 夏の暑い日に木陰で お昼弁当を開き 食べようとしよった。暑さに喉が乾いたけど 近所には水もないごたる。と そんな時じゃつた 畑仕事から帰ったんか 娘がお昼食べようとしている そのお坊さんに気がついた。『暑いのお昼ご飯でしたら 家にお寄りください お茶でも差し上げますが』『親切にありがとうございます』 木陰ですのでよいのですが ではお言葉に甘えて お水をいただけますか』

『それこそ お水でよければ すぐ汲んで参ります』 娘はすぐ家まで帰ると水を一杯汲んで お茶碗と一緒に持って来ました。『どうぞ あいにく何もなくて』『お礼にこの種を あげましょう。いつかきっと役に立つでしょう』 娘が植えたナンテンは いつも花が実が心を 楽しくしてくれました。その種を取って干しておいたら 旅の人が綺麗な実を見て 欲しがりました。その種を差し上げたら とても喜んで美しい 下げ袋をお礼にくれました。情けは人のためならずと 言いますね。



往還田は今も大事に

江戸時代《1600年代》ん 侍が世の中ん世話をしていた
その頃ん話じゃが 恵良にその頃は『参勤交代道路』じゃつた
道が 大分と熊本を結ぶ 『熊本県道』が出来るときに 用事が
のうなったとき 農家に払い下げになった。ただじゃなかったが
今まで大切な道路じゃつたとき 水を引いて米を作る事にした
。

『往還』と言うのは 広く立派な道の事を こげなふうと呼
びよったとき 土地を買い取った人たちも 大事にする意味も込
めち『往還田』ち今でん呼んでいる。巾が約3メートルの細長い
道が 田んぼになったもんじゃき 『往還田』ち呼んでもよく
似合うもんじゃつた。

その頃は春には殿様の 行列もあっち江戸《今の東京》の
将軍の所に 挨拶に行く決まりで 大分からなら約35日がか
りの 行列ん旅じゃつた。野津原を通る殿様は 領主の肥後の
殿様。その頃の野津原はほとんどが肥後領地 今市が岡領地と
天領地《幕府領地》と 別れちよつたので 岡領の殿様は挟間
から 別府[°]に出ていた。

巾が約3メートルなんは 駕籠を担いで行く両側と 前後ろ
などにお供がつくので それだけの広さが必要だったから。
宿場町のような野津原中心部は 道幅も広く《約8メートル》
これは 宿場としての店や宿、役所などがあるから 広くなっ
ちよつた。野津原は特別に広いのも 熊本領地の飛び地であり
殿様も 『いい所を見せたい』 そんな気持ちもあつたごたる
。

殿様の泊まる『お陣屋』を始め 役人の詰所、馬や駕籠の世
話をする場所 掲示板、茶店、なんかも並んじよつた。殿様が
泊まった夜は木戸も 閉められよつた。

『往還田』も道から田んぼになったが 皆んなに大事にされち喜びよるじゃろうが 今でんそげな名前じ呼ぶ 心優しい人たちが稲を植えち そんな米をいただく生活は 土があるから出来る物でんある。田んぼが畑に変わり その一部はバイパス道路により今はグリーンベルト線が引かれて ひとときわ鮮やかに。

通ると昔の人人が通った 当時の足音が聞こえそうな そげな気持ちにもさせられる。旅人たちが嬉しい旅 悲しい旅 いろんな思い夢を抱いて 通った『往還田』 声こそ出さんけんど 周りの水のせせらぎ 木々のさやゆれには 当時ん人の心の夢やロマンが隠されているようです。

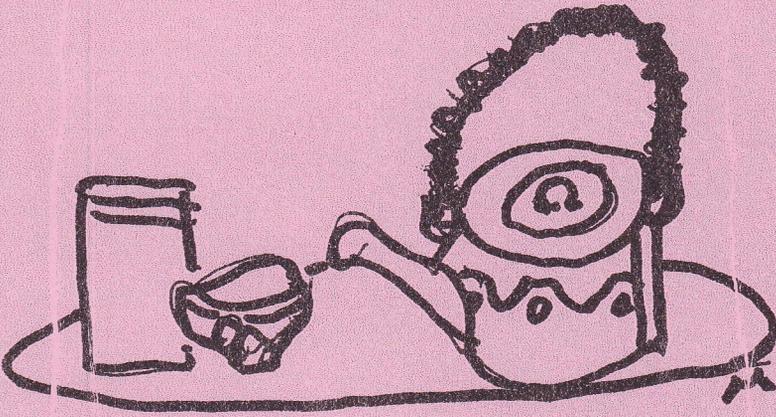
年と共にだんだん道の姿も 変わってやがて忘れられる そげな流れの中で毎年田んぼには 草花が今年も美しく咲いて 目を楽しませちくれます。水の多い時は川の浅瀬を ジャブジャブと歩いて渡ったが 大水の時にはさらに先の アベトの山沿いを遠回りじゃが歩いた人たち。

世話になった往還田には まだまだ人々の思い出がありそう。進歩した現在の交通は 車が多くなっち油断もならんが それなりのよさはある。じゃがテテク歩く旅人の おしゃべりする話もいろんな 土地の人の場所の話が 混じって時には方言も飛びだす。じゃき旅は道連れ世は情けとん言う。

馬子歌にもあるように 二の瀬、三の瀬 無事瀬を渡り とあるように 時には冷たい川渡り 大水に苦勞する遠回り。でも道があるから人は目的地に行ける。そしち手入れをしてくれる土地の人たちの優しい 心くばりがありゃこす 無事な旅が今日も出来よるんじゃろうな。いつまでん『往還田』の 優しい名前は皆んなじ 大事にしちもらいたい もんじゃが。



民話 俚歌



ビクシュニーのことで 女性が剃髪出家して仏門に入った 人たちが住まいした堂ん 周辺に集められたよう。山中に並んだ五輪な室町以前の作とも言われる。記録や文字もねえけど そんな形かと思ひ巡らすとそげ一感じる。古くは墓地じゃつたち、土地ん人たちが言うぬ聞くと 女僧わ意味する『比丘尼』 よつぼず高貴な女僧でんあつたち 想像がされちよる。

諏訪文化が栄えた場所だけに 人を大事にする風習がこげな面にも残さるる 羨ましいごたる情愛でんある。人を大事にする そしち大事にされた人たちを葬った そげな場所としち名前がち一た。そげな経過があつたんじゃ あるめ一かち仄かに浮かびあがる。少うでん10基はあつたんか 一部は地下に埋没しちよるが 一帯に並んじよつたぬ 集めち墓地にしたそん 場所じゃき堂を建てち名前をつけたんじゃなかろうか。

こん周辺にゃ別ん五輪も 集められち 墓地化されちよるんもある。篤志家が約50基程を 集めちいろんな刻まれた 形や文字も連想さるるが詳しい 五輪のもつ意味はサザカじゃねえ。おそらく戦国末期ん犠牲者じゃなろうか。追憶しても悲しい物語じゃが せめても人目に止まる場所は 慰められ喜ばれるのじゃあるまいか。

戦火に再三出会った地域だけに 詳しい理屈は別にしてん 巡り合わせた地域の人たちの 気持ちが絆になっち 今は花が手向けられる幸せ。古い文書によると戦国には 戦に破れて逃走する人たちには 懇ろに心ん手当てを施すよう とフレガされちよつたち言う。人ん心ん優しい取扱いは 今も変わらずに受け継がれて 来たんじゃろう。

城跡に小鳥の声が悲しく響く それもきっと感謝ん気持ちん 叫び声かん知れんが じゃきいっそうもの悲しいもん。

頼母子講

銀行やら農協やらが なかった頃の時代にゃ まとまった金を作るに『頼母子講』があった。寺なんかが世話しち 頭金を集めちくじ引きじ使い合う。そげな方法が大小はあってん 多種多様にあったもんじゃ。毎月1銭《当時ん話》ずつ掛けち 用事が出来た時に使う そんかわり後は利子を加えた 金額を終わりまじ掛けち行く。

欲しい時に優先的に使う くじ引きじ当たった人が先取りするなんか。講によっち違うが まさかん時に役立つ便利な 仕組みん簡易金融機関じゃった。ある地区ん方法を覗いち見た。こりゃ樽ん中に全戸ん名前入り 木札が入れちやる。それを回り子ん人が 目隠ししち錐じ突く。

当たった人が落札になっち そん月に集めた合計金を 貰うこちなるき丁度いる時もありゃ いらん時もあるじゃろう。じゃが当たったしが受けとる代わり 絶対ほしい人がありゃ 譲っちもらうこちもなる。始めに受け取ると戸数の合計金じゃが 次の月かるは先取りした家の 利子が入るき取り分は多うなる。

最後に受け取る家はそれまじん 11月ん利子も貰うきケックヤ 多い金額になるけど 先取りしたしゃソレナリン 役に立った訳じゃき損にゃなるめー。お互いん助あいん 制度じゃが今は金融機関が世話しちくるるき 便利がゆうなつたが 時のメニ合う手近かな頼母子講なゃ 助けられたしも多かつたそうな。

あるようじネエンガ金。ねーち思うが本当はあるんが金。さて金は使い道じち言うが 有効に使うんなら時にゃ思い切りもいいんじゃねえ ケチッテン生きた金じねえと 浮かばれんじゃろう
『手に持つと汚れたもん のごつ使うしもあるがなえ』



『優しい心に 恵まれた水』

地域の北西部にある庵にゃ 11面観世音菩薩と 回りに千仏を配した仏が並んでいる。かなり古い木像じ 詳しい事ゃ解らんけど 地域が古い時代かるあるんを 考え合わすると移動した時か ヒョイトスリャこん地区じ 祀ったんか憶測もさるる。元は公民館としち使いよったが 集会所が出来ちかるは 庵としち元ん姿になった。

人ん訪れも時折にこすなったが それだけに庵らしい風情は やっぱあっち『お接待』時折ん祭り なんかにゃ多くん人ん 賑やけゃ声に仏たちもきっと 言葉にゃのうでん心は嬉しい 昔に戻るんかん知れん。ここにゃこげな古い 民話が残されちよる。

長い旅ん疲れじ困った 老僧が一夜ん宿ん無心を言いよった。娘は寒空に空腹じゃ体が危ないと 中に招じ入れち一碗の 雑炊を盆に載せち運んで来た。生憎親はまだ野良仕事じ 留守番の娘が日ごるから 言われた『人の為になるのなら』と それを実行したのじやつた。

『温まりました』 頂いた碗を盆に返すと出された 茶をしっかりと両手に挟んで温もりを じっと味わった。どこから歩いて来たのかは 聞くよしもないが親が早く帰ればと 外を覗いて見た。北風が遠慮のう吹いち寒さがつのる。と老僧は言葉をかけて来た。心配させてはとの心くばりか。

『寒い地方で暮らしも大変でしょう』『はい でももう慣れましたので』『ですか 健気な事で』『……………』『今一番困っているのは』『……………』 やおら考えちよつたが 『水がモ チットあつたら 米も出来るんじゃが』『そうですか そう言えば田んぼは少ないようで』 農家も畑だけじゃ 辛い事じゃろうち思う。

そうこうしよるうち 親たちが帰っち来たようじゃ。娘は走り出ると 小声じ老僧が立ち寄り 一夜の宿をと請われたと告げ 雑炊をとりあえず差し上げた事も。『そうじゃつたんな よくまゝ気がちーち』 親も子どもん生長に 顔がほころんだ。じゃが後がさて 生憎ん 何もねえ時期じゃき。

僧もも一度門口まじ出ると 『お留守にお邪魔して お接待も受けありがとうございます』と 丁寧に頭をさげて お礼を述べた。『これはこれは お疲れなつたでしょう まゝどうぞ お入りください 寒かつたでしょう』 『いえ 寒さには慣れていますが 優しくして頂くともう』 『とんでもねえ事で まゝとにかく火の側に』と 囲炉裏んハテー勧めました。

旅のお遍路は辛い事が多いでしょうが 『これも修行と申します そんな 宿命を背負つての旅ですから』 『そげえ割り切ると 少しは辛さも軽くなるでしょうが とにかく お目にかかつたんも巡り合わせん ご縁でしょうきコイサは ごゆっくりと と申しましてん お構いは出来ませんが』

母親が心づくしん『カタクリぜんざい』を 忙しく作つたが これも空腹にゃ美味しいご馳走じゃつた。真心が込められちよりにゃ 天下逸品でんあろう。真っ赤ん炎に全身が暖められち 腹も満たされると睡魔が邪魔をするもん。コツクリコツクリ 旅ん疲れが醜態も見せちよつた。

翌朝早めに起きると近くん谷に 帰っち来た老僧は食事を執るまえに 両手を合わせると『娘さんが心配していた 水が近く谷にきつと出るでしょう』と 静かに告げちくれた。やんがち谷の流れが多くなつち どうやら米も作れるごつなつた。娘の優しい心くばりん接待が もしかしち神や仏に届いたんか それかるは 少ないけんど 途切れるこたーねえち言う。



道は影べら

庄屋さんのフレじ新しい道を 作るき山をワケチホシイと 申し
でがあった。貧しいが欲うハラン男は 庄屋さんの言うんならば
気持ちユウワケルコチーした。隣ん欲ん深え男は『代わりに畑でん
クルルナラ』ち 申しでたき庄屋さんな 二人にお礼を言うち望み
通り スルコチナッタ。

欲う張らん男は『山はドウセ影じゃき』 影べらん畑でんいいち
思うチョツタ。欲ん深え男は『なるたけ陽当たりんいい』場所をち
申し上げた。1月ホズシチエート 道を作るごつなつた。縄じ計り
はじめたが 影べらを貰った男ん畑は 道う作るに木を切ったき
陽がゆうあたる畑になった。

反対に陽あたりん畑を 貰った男ん畑は陽が 当たりすぎち暑い
時にゃもう 大変苦勞したごたる。そしち新しい道は木陰ん当たる
影べらを通したもんじゃき 陽あたりん畑も皆んな ゆうなつた
。じゃが日年んことじゃつた あんまり雨が降らんモンジャキ 畑
はイロキアガッチシモウタ。

『庄屋さん ナンサマ日照りじゃき暑過ぐる』 文句を言うもん
じゃき 『ほんなカサかるチット 水流しちゃろう』ち 井路ん水
を流しちくれました。そん水う畑に撒いたもんじゃき 『こりゃ
言わにゃ損じゃ』ち 喜んでイットキ水を流しチョツタ。トコロガ
世の中そげ一調子んいい事 ばっかりゃねえ。

そん晩にダマシ雨が降りで一た。いい加減にシメッタ畑に こん
だ雨も降ったもんじゃき おおごとビッシヨリになった畑は もう
水びたしにナッチシモウタ。欲張りもここまじくると アキレカエ
ッチもう 庄屋さんも里んしも大笑い。こげな事ァまゝ人間のする
事じゃねえがなえ。

吉熊ん宝塔

吉熊ん山ん木陰にひっそりと 室町時代の石造宝塔が 羽原に通ずる道ん上に静かに時を過ぎしよる。朝草切りん馬や牛が 通り炭を運ぶ人たちん話し声を 楽しみに何十年も過ぎた。杉並木に吹く風は夏ん汗も 心地ゆう肌離れしちくるる。いっぺんに飛ぶもんじゃき ヒンヤリする事もあるが 自然の風にゃ情愛もある。

俗界かる離れち建つ宝塔 陀羅尼経を納めたと言わるる こん塔は半肉彫りと葉研彫りされた 1.87M石像は 当時としては 佳作に値するとのこと。人の目を引き付けて 木の間隠れに光が映えち 一層そん美しさを覗かせる。時折に通る入れ薬屋さんも 縁を頂くのか頭を垂れて 礼拝する。

高い山に位置したこの場所 見渡す谷くぼまじ自然が 整然とあるんも無言に物語る歴史が 浮かび上がってくるよう。当時の人たちん暮らしが垣間見られるが 老若男女んしあわせん夢が 叶えられたんかも知れない。そんな過ぎ去りし日を忍べば 現在の里の人たちん幸せも きっと念じられているのじゃろう。

ワラビ摘みに訪れた人たちが 山菜を愛でる一時そこには 先人の残してくれた足跡とともに 人ん生き方まじ教えられるごたる。万物が人の命を繋いでくれちよる そん恩恵を忘れないごつ 次ん世代にも受け継ぐ風習を 乱してはならないち思う。そげな囁きも聞かれそうな 静心な場所でんある。

かつては遊牧ん民が移動したんじゃ あるまいかち思われる場所。吉熊、長野、今市、わ点と線じ結ぶ時 ありし日の華やかなりし頃が 走馬灯んごつ薄彫りさるる。松ん合間に咲く草花にも そん頃ん命が受け継がれち 豊かな煙りが立ちのぼった 昔が忍ばるる。故郷んよさがしみじみ 味わえた場所じゃつた。



もうすっかり日も暮れちよつた。小さな子どもにゃ足んシモヤケが痛んじくる。ケンド仕事が済まんと 子どもぁ取っちくれんもんじゃき 泣き声にツリコマレチ 自分も泣いちしもうこともユウアッタ。ヒモジサもかたっち 涙が頬を伝わる。竹山ん麓まじ来ると大根が積まれちよる。

じっと見つめた子守ん子どもぁ いつんなかめ一かそん 大根に忍びよつた。歯にしみる大根の冷たさ とそん甘さ。そりゃ朝庄屋さんに納むるもんじゃつた。ふと気がつくと目の前に まっ白い雲がソシチ老人が 『今食べたな明日納めるもん 一本足らんでん庄屋さんが どんくれ迷惑するか』ち 言われち子ども心に 我に返つた。

真っ赤な顔じうつむいたままん そん頭ん上を『こんだだけは正直な親孝行に免じち 許してあげよう』 するっと消えそん雲は山ん向こうに 行っちしもうた。

子供を親に渡すと急いじ さっきん麓まじ来ると なんと庄屋さんは足らんごつなつた 大根を洗いよる。『すみません それは私が洗います』『いや山ん神様が ほしいと言うたのじな あげたんじゃ』と 言うちくれたき どんくれ嬉しかったか。子ども心にゃもう 涙がコボルルばかり。目の前まつ暗になった。

『子守もつらかろうが 大きゅなつたらそれが役にたつ』 見あげた山の上に月が美しゅ 照っち二人ん顔を照らしちくれた。小雪ん降る細道う帰る 庄屋さんの姿を見送ると 竹ん笹に積んだ雪がサラット落ちた。そん音がまるじ神様が 『張りこみよりゃいい事があるから』ち 言ってくれているようです。

家の旦那様が『夕餉が待っちよるよ 頑張つたな』『ご免なさい……………』『人間それに気がつけば 立派な事じゃよ』

方言説明

- 37p ねえけんど…ないけれど。じゃつた…でした。よっぽず…よほど。こげな…こんな。そげな…そんな。ちーた…ついた。たんか…たのか。ちよるもんじ…なったもので。サザカ…はっきりしないが。フレガ…知らせが。
- 38P ずつ…あてを。じゃが…ですが。ケックシャ…結構。ソレナリン…それに似通う。メニ…合間に。ネエンガ…ないのが。
- 39P ヒウイトスリヤ…もしかしたら。こすなつた…ように。のうでん…くても。こげな…こんな。どこから…どちらから。モチット…も少し。
- 40P そうじゃつたんな…そうでしたか。そげえ…そんなに。コイサ…今晚。カタクリぜんざい…カタクリをつかった汁粉。やんがち…やがて。こたぁねえ…ことはないでしょう。
- 41P フレ…連絡周知。クルルナラ…いただけるなら。スルコチナッタ…するようになりました。チョツタ…心待ち。エート…やっど。じゃが…ですが。モンジャキ…ものですから。イロキアガッチシモウタ…乾きあがってどうにもならぬ。ナンサマ…なにぶんにも。チット…少し。ダマシ…急に。ビッショリ…ずぶ濡れになって。
- 43P シモヤケ…凍傷。ヒモジイ…空腹。なかめーか…少しの間に。もんじゃつた…ものでした。ソシチ…そして。こんただけは…今回だけは特に。するっと…うまくぐり抜け。さっきん…さっきの。のじな…のだから。どんくれ…どのくらい。コボルル…こぼれ落ちる。

方言は前、後、に連なると解り易いのですが 単語になると少し難しいけれど だけに温か味もあります。ご愛用ください。



女性の底力

2019

すすむ歩

来年もよろしくお願ひ致します

千秋と言うのに自信を

色白ん娘がなんか妙に浮かれん ばあさんに聞くと『男んごたる名前』ち ドウクル時にゃいつも 浮かれんに ちヨッポズそん名前に不服なんか。そげえ奥深う考えチヨル訳でん ねえがやっぱ仲良しん子に言わるりゃ 女ん子じゃきナサケネエンカン 知れんのんフントジャロウ。

雨降りん日じゃつた 傘に見覚えがあるき 歩いちきよるんを待っち 『おはよう 何か元気がねえのう どこか悪いんか』原因な聞いちよつたき ワダットそげ一聞いたたら ニヤット笑い顔になっち 『うっとうがん名前』『そりゅー苦しよるんか』じゃけんどチ イイテエ気持ちがちらり 目に出ちよる。

『あんな 千秋ち言う名前は 千の秋んいろいろな 苦しみヤラ悩みヤラをじっと 受け止めち 寒い冬に我慢シキリだしち 辛抱しち心がチットズツ 豊かになっち明るく 春を迎えるこちなる。そんな時にゃもう苦労も 悩みもヒトナミチ 思えるまじい成長する人間になっちよつた。

そげな物語があつたき チットでん いい子にナッチホシイ。親ん思いを貰うたき 秋ん苦労悩みも 冬ん寒さに気持ちが変わり春になったら もうクヨクヨセンん りっぱな人間になりよつた。我慢ついい誰にも負けんが 心は優しうじ豊か。じゃき人に好かるごつなつたそうな。

『…………』『どうな 解つた』『うん…………』『よかつたのう しゃんとしちお前あ色白じベツピンじゃねえか』『ふんと』 ぼろり本音も出た やっぱまゝ子供じゃが もう苦しする気になる乙女心でんある。ほつと^たたような 笑顔に戻つた横顔が やっぱ愛くるしい。『あげまじ気にしよつたに』 ちょいとオカシュナッタガ ふんとエエラシイモンジャ。

『あんなぁ こんごろオトロシユ 機嫌いいんじゃがえ』『そう
な こんめ一胸に抱えくうだんが 解けたきじゃろうなぁ』 ばば
さんもなんか 自分ガンコトンように ヨロクジョツタ。人ん名前
にゃつけた人ん願いもあるじゃろう が巡り合わせた運命が まる
じ気がつかんがチャント オサマッチョルち言う。

気立てんいい千秋は そん後はごく普通ん少女として 成長しち
いつん仲間えか嫁にアルイタチ言う。『いい相手に巡り会うたんじ
ゃな』『それで親ん知らんなかめに』『一時ぁ苦しよったが や
っぱ娘じゃなぁ』『言われち本人も まるで謎がとけたんか 日ご
ろちゃ違うごつ 明るうなったんで』 親も有頂天になるごつ…。

今日も介護に来●ちよつた。少し体調を壊した親に 優しい走り
使いするんも イジラシイゴツ人間の 真髓に花を咲かせる人生を
垣間見る。気にしちよつた名前が あれから所帯をもっても 多く
ん人に好かれ愛され 幸せな人生を笑顔じ過ごしよる。それは本人
の徳が自然と現れた そんお陰かん知れん。

色白は百難隠すち言うが ただそれだけじゃねえ 自分の心まじ
真っ白にもシチクルル。年はとったが皺が出てん 笑顔はそれなり
ん価値もある。『ちっとん変わらん』『なにや年寄りゅオダツン
ナ』『アン時はオオキニ』『何かのうモウ忘れた』『またそげな』
『ゆう頑張ったなぁ』『元気しちよつてな』『おおきに あん時ん
話はうそじゃきの』『いいえ 絶対嘘じゃなかつたわ』『……』。

ひょうとした事じ巡りおうた千秋さん でん努力し善意に解釈し
ち 笑顔じ生きたそんご褒美が ついて回った人生が 幸せに結び
ついたと感謝するそうな。その気持ちこそが自分を 周りを幸せに
してくれた何よりん 証かん知れないちしみしみ 思うそん気持ち
こそが 生きる宝物じゃろう。そしち底力も發揮した 人生双六は
いつまでん続いてほしい 元気で。



やれば出来る格別な味も

野の生物に関心があってん 特技にゃ結びつかんが 世のたとえ
でんある。じゃが見よう見まねが ケックシャいいものに辿りつく
事も多い。春先にユウ貫っち食べる フキンつくだ煮。いつヨバレ
テンなしコゲー美味えじゃろうか。貫うたんび ヨバルルタンビ
そんな謎はなかなか解けん。

『あい今年ん初もんが出来たで』 ふきんを無造作にかけち 裏
木戸かる入っち来た。『え もう取っちきたんかえ』 もう独特ん
香りが漂っち来る。自然たぁゆうしたもんじ 時期になると性根が
いいき 芽を出しちそよ風に揺るる。じき目につくき遠慮のう 取
っち帰るとバタバタ皮を取り 水にナンコンジ あく取りする。

チット バチクリアガッタごたる 水にいれたまんま 七輪にか
けちグタグタ煮ると 何かしよるなかめー いい色になっち煮えよ
るんも エエラシイ。何もシャベランデン 季節ん香りと味が勝手
口かる 来るんも隣近所ん 付き合い人生双六。食べて一なぁち
思いよると相手に通じるんか 不思議なもんじゃ。

そうこうしよるうち ちっとんずつ何か覚えち ガイト取った時
どま 『たまにゃ作っちみらん』 『しよわなかろうか』 『しよわ
ねえ 煮さいすりゃいいんじゃき』 慣れたしゃ簡単でん そげ一
気安うは出来め。けんどヤッチみらにゃ いつまじたってん一年生
じゃきなえ。

『ちっと煮ちみたき』 小皿に乗せち持っち来た。まこち色がゆ
う出ちよる。まぁだいたい同じ色にゃなる がそこはそこじ話し方
う褒めた。『ふんとえ』 もう興奮気味になっち 次ん言葉を待つ
ちよる。『あんなぁ こげー上手に始めかる 作ると悪いで』 顔
見合わせち大笑い。見事合格じゃった。

『どこかじ覚えたな』『ちゃーら違うで あんたかたんぬ 見
ちよつち覚えただけで』『そうな ほんなやっぱ先生がいいきじ
ゃな』 またまた大笑いになった。でん それも嬉しい事でん
あった。ミマネじ覚えた自分がん 努力は腕に染みついち もう
忘れんごつなちしまう。

『こりゃいい 田中煮じゃな』『え なんのこつな』『あん
たん名前がちーたんじゃこと』『ちやーら せちー』 と言うた
もんのやっぱ嬉しかった。覚えてえち執念を燃やしたんかんち
振り返ち見る。つくだ煮ち簡単に言うてん いよいよ自分じ煮
ち 『ふういい味』にすんな ケックシャ難しいもん。

砂糖、とうがらし、じ味かげんすりゃマァ お茶受け食事ん
副食には結構おつなもん。酒の肴にも上品に役立つ。ぬかずけ、
塩づけ、砂糖づけ、なんかにすりゃ 保存食にもなる 使い勝手
んいい食財。春先かる初夏にかけち 好きなシャモウ目の色が
変わるごたる逸品。

蒨のとうが出来んがツワブキ 一般の蒨は花はつかんが 根
がハビコルき周辺にひろがる。山菜の代表格でんあるが 皮を剥
く時にゃゴム手袋をつけたがよい 灰汁が強いから手に つくと
なかなか落ちにくい。色白んはだにはムゲネェキな。やっぱ気
をつけたがよかろう せっかく美味しい味が出来てん 汚れたご
たる手じ差し出すと 味もコケラもノウナッチシマウキ。

田中煮いい響きん名前 こんたアンタカタン名前じ 食卓に並
ちみちゃどげー。香りち言いチット苦味ん効いた 逸品な食欲も
そそりそうじゃき。美味しく食べることじ 栄養も身につき満足
感もあっち 食ん楽しさも倍加さるるんじゃのあるめーか。口か
る入る食べ物 身になり肉となるとん言うき。



芸と奉仕活動の心の花開く

運転出来るのも必要に迫られる 農村じゃ欠かせん利器でんある。時には人の利便にもなるが 見て見ぬふりの出来ぬ性格が そうさするんじゃろう。文芸も人となん接遇にゃ欠かせん 人となりん心ん糧として備える 暮らしん知恵じゃつたんか。それが思わぬ影武者にもなっちくれた。

限られた字数に込めるここん 現しかたが文字ん制約も 物ともせずには挑戦する時予想外の 作品が浮かび上がって その気持ちまでん乗せちくれた。民謡もそれは唄じゃない 生活ん声じゃち思ふ心を 抱き合わせち旋律に乗せた曲。踊りん姿にもそんな情愛が美しく滲み出るから 不思議でんある。

業務に請われち取り組む執念 暮らしを支える手段にも 人生ん勉強にもと苦勞に甘んじた 長い人生の暮らしには 3世代の笑顔がいつも応援しちよつた。『加勢しちくるる』『忙しいけんどのいいわ』 同じ境遇ん人を見兼ね出来る 心ん支えは相手にゃ どんくれ嬉しく助かるんじゃろう。

『あん時い助けちもろうたき』『いつも気かけちくるるき』そげな言葉が涙声じ返る時 自分の事んごつ喜ぶんも 喜べる素地があり苦勞した過去が そげなふうにサセルんじゃろう。苦勞した期間じゃつちある 困った時に知らぬふりん しジャツチあった。ケンドもしかしち そんな時はどげもナランジャツタンジャロウ。ち善意に解釈しきる度胸は 苦勞したきこす出来もする。

義父ん50年忌うするき 連絡されち『いや』た言えん そんな心ん絆ん強さ情愛の気持ちは 人をそこまでさせちくれる 素晴らしい人間哲学を培ちよる。人は人の誠には信じ返す 倫理があるもんそれを欠いては 人としてん悲しい存在かもしれん。

こんめ一店を田舎に開いちよるしが 『ご免ないつも頼っち悪いけど』『いいんで 頑張りよりゃ又いい事もあるき』力つけち朝早うでん迎えに行く。『しかとしもねえ ゆう』ち人は言うがそりゃ それでんいいんじゃねえ。『ほんなあんた行っちゃちくるる』 返事は決まっちよる。

儲けにならんシニャ取り合わんじゃ 世の中あんまりじゃねえ それとん困った事が 全くねえんじやろうが。世の中そげえ甘うはねんきな。いつかで何年か先 いや子どもん代かん知れんが もしそん時いなっち 『あんたかたん 親にゃ全く世話にゃなっちよらんし困った時でん 加勢はしちくれんじやつたき。

そげんこたーネエニシテン 世の中周り回っち動くんが世の中。ひとりでに動いちよるち思うと そりゃ大きな大事で。心に思うてん出来る時にゃ 手をだし心じ支える それが人生ち言うもんじゃねえかな。自分一人ん力どま知れちよる。一人じゃ生きられんのも人生なんじやろうなえ。

『どき行きよっの 乗らんなドウセ行くんじゃき』 気軽に乗せるんも勇気がいる。もし事故起こしたらち そげなこつー考えると知らぬふりが 心配なしでんあるけど 年寄りがテクテク痛い足をイラブケーチ 歩くぬみると『もし自分がそん場じゃつたら』ち 心に燃える人ん情愛。

『男踊りなら得意じゃこと』『それがこん頃はひざが』ち苦痛もコラエラルル範囲じゃが 人並み体調は下り坂になる。じゃが一度舞台に乗ると 不思議と緊張神経が伸びる 若さが甦るもんじゃきまゝ 続けよる体調管理に 心くばりしちよりゃまだまだち 言いたい心をじっと押さえち『無理せんごつしよえ』 それ以上は言うのが酷にも聞こえるのじ。



方言説明

- 45P ドウクル…冗談に戯れる。ヨツボス…よほど。ナサケネェンカ…悲しくなつて。フントジャロウ…本当でしょう。ワダット…無理に。イイテェ…言いたい。ヤラ…など。シキル…出来る。チットズツ…少しずつ。ナッチホシイ…そのように希望。
- 46P オトロシュ…おそろしく。ガンコトンよう…自分の事のように。チャント…きちんと。アルイタ…お嫁に。シチクルル…してくれます。オダツンナアン…調子乗せるなあ。オオキニ…ありがとう。
- 47P ケツクシャ…結構。ヨバレテン…招かれても。ナンコンジ…投げ入れて。チット…少し。パチクリアガッチ…吃驚するように変形して。シャベランデン…話さなくても。そうこうしよりゃ…そのうちに。けんど…けれど。ふんと…本当に。
- 48P ちゃーらせち…あらまうどうしょう。シャモウ…好きな人はすぐ。ハビコル…ひろがって。コケラモ…見かけも。ノウナッチ…なくなつて。アンタカタン…あなたの家の。
- 49P するんじゃろう…仕向けるのだろう。しちくるる…加勢して。どんくれ…どれだけ。サセル…仕向ける。ジャツチ…だって。ナランジャツタンジャロウ…ならなかったのでしょう。
- 50P しかとしもねえ…大した事もない。ほんな…それなら。シニャ…人たちには。ネーニシテン…なくても。ドウセ…い、い、ずれば。コラエラルル…我慢も出来る。ごつしよえ…ようにしなさいよ。

人の氣づかぬ肝っ玉母さんの的な 人が多くて世間の荒波に びくともせんじ人ん為にゃ ひと肌も脱ぎきる。じゃき涙かくしち生きた人たちも けつくしゃ多かったが。戦時下にゃそげな話も。

ガンコトンように…ガンはあんたがん…貴女の物のように。
ヤンガン…貴方ん物のように。このように前にある言葉により
多少の内容も変わるが 意味は同じ。

チットズツ…少しずつ…量の問題。時間の短縮。微妙な感覚。
ガイト…たくさん。多い。特別に多い。など 前につく言葉で
かなり 変わって来ます。

チットずつ食べた。飲んだ。使った。植えた。など。
ガイト貰った。働いた。使った。……………それらも

ほんの少しのかすり傷。目に擦り込む程ん種。
思わぬ程のみやげを。まさかあんなにとは思わずに。

ジャツチ…でも時には。考えられない事に。言い訳にも使う…
そう言いますが。知らなかったもので。それなら
そうと早く教えてくれたら。

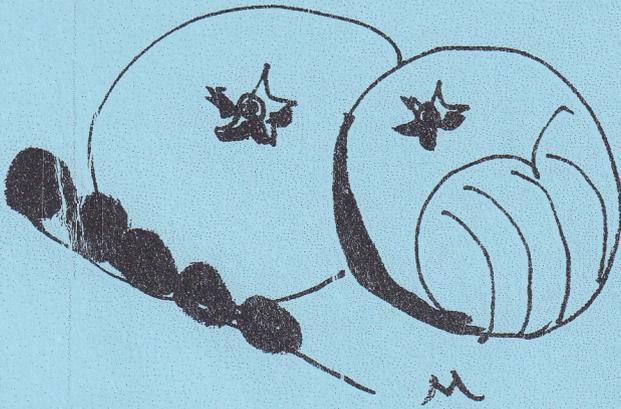
うかつでした。考えすぎで。もう訳ないけれど。
勘違いで。などになると 失敗も好転しそう。

※ ことばには綾もあるし 使い上手は失敗失言も 旨くカム
フラージュするから 被害も最小限に許させる。やっぱ私
の勘違いで……そげなはずはないが……イイツノル これ
も典型的な断り下手。相手に嫌な思いをさせても 得には
ならない 『叱り上手に褒め言葉』の 例のように心が
相手に通じると まさに『つつろく人生』に なりそう。

さてと…そうそう次は『玉手箱』を 開けるジャンルじゃつた。
次号じ又『女性ん底力』 お楽しみに。ご機嫌宜しくお過しを。



玉手箱



玉手箱

合併がまるで敷かれたレールを 走るように進んで大分県は 時の優等生でもあった。野津原村も隣接の今市村と 同じ七瀬川流域でもあっち 話が決まり昭和30年《1955》合併。大分郡の西部の山間農村としてスタートする。合併後ん第1回議会選挙は 特に定員20人で決定した。30, 9, 16⇒34, 7, 31日迄。

時の議員有志の方方は 武田忠、岡松直、佐藤嘉門、久多良木亀人、末松禅勇、波多野孝、島田倉太、小野伊八、伊藤晃、小野菜馬、佐藤亀彦、奈須永雄、渡辺憲一、河野主税、甲斐栄馬、橋本勝、立川義昌、工藤直、佐藤広、小野寿生、以上のみなさんでした。

そん頃ん世相はどうじゃったか…NHKんTVじ衆議院選挙ん開票速報か始めち放送。昭和天皇が始めち国技館じ 相撲観戦も。プロ野球んスタルヒン選手が初ん 300勝を達成した。

神武景気、アルミン1円貨幣誕生 マンボスタイル流行。トランジスタラジオ発売。10円牛乳登場。TV<電気掃除機普及はじまる。ポンポン菓子づくりもこん年に広がり 『おんな船頭唄』『娘巡礼』『小島通いの郵便船』なんかん レコードが発売された。

合併運動は進んじ 大分県な10市66町村にまじなった。

野津原も今市と正式に合併しち 32年に野津原村になった。34年2月にゃ町政を施行 新しい大分郡野津原町としち 発足し9月にゃ議会議員も 14人に決定しち 新メンバーが出揃った。県内ん動きじゃトキハに 初んエスカレーター登場。NHK大分放送局がテレビ放送開始。大分鶴崎臨海工業地帯1号地ん建設起工式。こん年は岩戸景気にわく。県下ん冬んボーナスは平均額が約2万円とか。



昭和34年《1959》 新しい野津原町ん選出議員な 14人になったが10人が新人。斬新さが伺えよった。

顔ぶれは 高崎長馬、工藤長谷丸、安部豊、福岡保、生田昂、山崎照弘、小出林、相沢久己、小野楽馬、工藤英雄、波多野孝、甲斐栄馬、池辺只男、河野主税、以上の勢悦揃いです。

こん年皇太子と美智様のご成婚 そんな祝賀パレードにゃ沿道に53万人が お祝に集まっち喜びを 共に分かちあつた。こん年にゃレコード大賞が創設 第1回受賞曲『黒い花びら』…水原弘に。

世相は岩戸景気とカミナリ族横行 カーブーム 緑のおばさん登場。タクシー個人営業も出来。月賦チット制度流行。メートル法も実施されち尺貫法も 影が薄くなっちしもったが 馴染み深え一生瓶 百匁、一合、一間なんかは すぐにゃ消えられんな。

伊勢湾台風もこん年中部地方に來襲しち 死者不明者5041人じ 明治以来ん大最大事故。児島明子が ミスユニバース審査に入賞。

映画じゃ『人間の条件』『ギター持った渡り鳥』『にあんちゃん』がスクリーを飾った。

歌ン世界じゃ『南国土佐を後にして』『古城』『黄色いサクランボ』 ラジオ大分も開局。

第19回愛知、岐阜、三重、3県での予定国体は 台風被害の為参加中止。大分県じゃ木下郁知事が再選、県下に干害ひろがる。新光てんさい糖工場の火入れ式。県営工業用水通水式。九四連絡道路建設促進協議会発足。大分市、鶴崎市の合併問題起こる。こげなふうに臨海工業地帯にゃ 見事な息吹きが踊りだよった。今から約65年はず前ん 事になるごたるな。



連鎖劇の撮影に見直される

定期的に回ってくる劇団が 特技の連鎖劇には人気があっち そん現場撮影がありよった。まだ橋も木じ頑丈に作った 水も多いき そん影が川面に写っち 仕上がった劇場でん画面にゃ 独特ん臨場感が醸しだされち それを知っちよる場所と来りゃ 尚更旅愁誘う劇になっちしまう。

昼下がりに人ん通りが少ねえ そげな時間をち言うが じゃねえ 昼休みん頃う見計らうち カチンコが鳴ると機械が ジジーち快音ぬたてち役者が動く。時代劇ん主役が追われち 傷が痛むんか橋ん欄干を伝わる それもエートンコトじ 追いかけた相手もそりゅ 見つけち大声じ迫ち来る。

クライマックスん時まじじ ハイストップ。続きが舞台劇に連なる面白さ 会場が明るくなった瞬間 ロケン続きが舞台セットん前じ切り結ぶ場面になった。瞬間の移り変わりにアッと 目をコスルナカメニ芝居が続く。拍手が鳴ると誰言うとなく 会場に嵐んごつ拍手が鳴った。

切り結ぶ場面になると 決まっち助け船が出ちくるもん うまく立ち回り辛うじち助かり 命拾いした侍ん嬉しそうな顔。助けた人も満足げなラストシーンにゃ 会場も涙もろくも誘わるる。バツと明るくなったもんじ 皆んなが顔見合わすると 涙こぼしたんがおかしいんも隠さんじ 満足そうな観客。

『こん前撮影しよったぬ見ちよつたき どしてんコイサ見たかったき 来たらやっぱアリユ見ちよつたき いいなあ』『じゃろう あん時おオトツタンかる 怒られたけんど それにゃ変えられんなえ』そぼじ 近所んジイサンが『大けな声じ言いよると 聞こゆるど』『え 来ちよるかえ』 慌てち見回しよった。

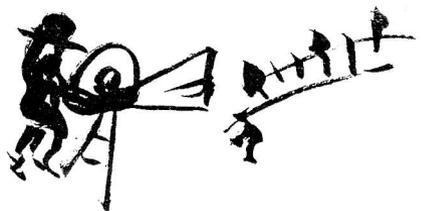
舞台劇場じゃ広域ん場所ん 状況は出し難いがそりゅ 外じ
撮っち瞬間的に取り替えると 見た目にゃ凄さが加わっち魅力
まじ 感じ撮る事が得をするごたる。数こなしち繋ぐんもあり
舞台劇だけじゃ限られてん 連鎖劇じゃ一回の相当広い 場
面まじが連想もでくる。

疲れ倒れちよる旅人に 川ん水をすくうち運ぶんも せせら
ぎん場面かる両手じスクイアゲ 足もと危ないんぬ 上下か
る撮影した動き何かは 舞台だけじゃ無理ん話。自然の物が利
用もされ時にゃ借景にも。木の橋にも独特ん風情が撮れ 人と
ん調和も見事に現せるごたる。

合間にチョコット話を聞いたが 筋書きは一切話さないんが
決まりんごたる。それだけ世話になった場所の 気持ちを大事
にもシチョルゴタル。ジャガ現場を見ちかなりセント 芝居が
こんき待つ身の辛さちゃ チットおおげさじゃが 楽しい夢も
貫うたごたる優越感も なんかあつた気が今も残る。

あん頃ん頑張ったアンシたちは 今はもう引退したじゃろう
が 田舎の人たちにチットデン 面白い思い出の残る芝居を
見てもらう為ん努力した そしち喜ばれたり勉強したりが 心
にいつまでん残っちよるなら それもいい巡り合わせの 人生
じゃつたんじゃろう。

故郷が舞台劇の中に連鎖劇としち 舞台にかけられたんは
素晴らしい時期でんあつたんか、仄かな夢を楽しんで他界した
人たちも 『いい夢見せてもろうた』ち 話ながら喜んじまる
事じゃろうな。あん橋も水害に流されたりした がそげな歴史
はいつまでん 人の心に納められち そっと出ましたで。あん
せせらぎ 役者の笑顔はいつまでん 故郷ん人たちん心の底に
焼きついて。



『原村ん組合』

表往還が抜くるごつなつた頃 小岩戸かる戸黒に進むごたる話がありよつたがそんなコースなら 戸黒かる急坂がどしてんいるごつなる。となりゃヤッパ表んへらを 進むんが常識ちゅうこちなつた。ここにゃ早うかる地域が作った 組合があっち肝いつた奈須秀造たちが 熱心に力をいれよつた。じゃき職員も番頭んごたる 意気込みじそりゃもう ハリコミヨック。

元売り場所かる仕入るるき 安う組合員に売るこちなる。そきもう他じ買うよりゃ得もする。サービスんよさが売れ行きにも。職員がまた読み書き算盤が 得意じゃき至れり尽せり。注文にゃすぐ自転車じ行くき 時んまにもあう。組合員も下詰、湛水まじ広がり貯金ももりもり。赤ちゃんが生まれた すぐ職員が喜びに参上すりゃ『定期貯金』の話。

鶏飼育じ卵を共同出荷する 『鶏博士』とニックネームも。それが絆になつち農家も豊か 職員も弾みがづくき ますます拡張できた経営向上。鶏肉んくん製、付加価値をつけた経営 酪農にも広がり4日クラブの活動が これに呼応した一大集落に発展して そんな核に組合の業績も 高く評価されちよつた。

現金決済は仕入れ価格をさらに 安くも押さえられる方になり生活物資が 整うまでに拡大した組合になった。のちに集合体から合併となったが 根幹には当時の先輩の苦勞が きちんと継続されて信頼と経営技法は 長く続いてくり返された。『定期のおじさん』『卵の博士』『何でも屋』とニックネームが名前変わりに 笑顔の交信がいつまでも 余韻のこして歴史に刻まれた。

『こげん狭い所じえ』『広かりゃいいち 言うもんでんねえきなゝ』 それも理屈が成り立つもん。物を動かすテクニクは 繁盛ん証でんあるごたる。サイレンが防犯灯がある 当時ん面影 仄かに香って……。

『恋の七瀬川』

大分川ダムがやんがち 完成するじゃろう。美しいせせらぎん
水は温見ん イノコかる流れはじむる。ある年の夏休みじゃつた
。大分市にある盲啞学校の 生徒さんたちが夏の一時 束の間の
水に親しむ水浴に訪れちよつた。自然の景観の中に 所所に大き
な石があっちこちに その合間にそっと入る 水ん感触。

目が不自由でもそれだけ 香りには敏感な生徒さん。ふっと胸
に描き脳裏を刺激したのか 美しい詩が浮かびあがった。

『思い出とここに来て 一人歩いた
岸辺には 今年も 白ゆり咲いてます。
楽しかったの 素直になりたい
も一度 二人寄り添う 霧の七瀬川

幸せと書いて見た 心の中に
忘れられぬ あの人の 遠くの町か
追っかけても 消えて行く 淡いシャボン玉
も一度 呼んでみたいの 夢の七瀬川

せせらぎも 消えて行く 流れるままに
あなたとの 生活 沈んだ水の中
泣いて見たって 尽きない 叫んでも
も一度 燃えてみたいの 恋の七瀬川



巢立ち思いで胸に 希望の星を描いて 暮らすその人の心には
きっと この日の事が走馬灯のように くり返されているので
は……詩の一部をご本人の了解で 変更してあります。やが
て湖底に沈むけれど 夢はロマンは心に いつまでも残って
新しい思い出に変わるでしょう。

物いわぬ野津原の 美しい石の文化

野津原にゃフント 美しい石の文化が 至る所にあっち過ぎた昔ん 夢やロマンを物語っち くるるごたる。古代かるん自然の姿残した 崖や石積みが 自然の中にそよぐ 野花なんかにユウ調和しち 目を楽しませちくれ 心を癒しちもくるる。室町時代ん石造文化も 数多く見らるる。

石仏、石造文化、石積み、橋に心こめた先人の石工 微笑みかくる羅漢石仏 高さの威厳 底辺の魅力なんか 大分市奥座敷らしい 宝物がそっと 何か語りかけち くるるごたる里。

9万年もん昔 阿蘇ん噴火ん際 溶岩が流れ下っち 野津原ん谷を埋めち冷え固まったらしい。そげな溶岩が あちこちに残るんも 今にしちみりゃ なにか神秘的な 謎を残したんじゃ なかろうか。民話にもものこる 武将たちが 通過する刹那 素晴らしい里と評価した 蜜命の志士が 駆け抜けた里。

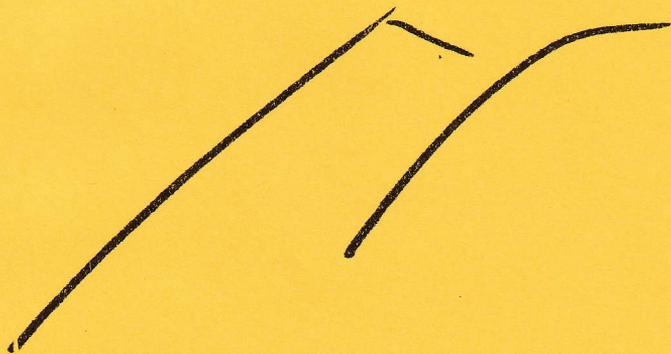
静かに関心が持たれかかった 物いわぬ石の魅力は 輝く前の囁きかん知れん。火山灰があったり 隆起した砂礫岩があったり 粘土土に作を願い 砂土に豊作を祈る 里人たちの 石に対する執念想いは 昔も今も変わらない 美しい波紋残しち 明日に向うち進みよるごたる。

石の魅力が見直さるる そげな時代が到来する 奥座敷野津原ん 宝物はたれか 一番先に見つけダスカナァ。サガシチミルンも おもしろいんじゃ なかろうか。『なにえオモクリーェ』なるはず ダンダンゆうなる ホッケノ太鼓じゃな。実り一番の旗取りヨーイドン。高い石垣ん上じ 七瀬馬子歌でん聞きてえなあ。

方言説明

- 5 3 P じゃつたか…だったのか。アルミン1円…現在通過の1円貨幣。ポンポン菓子…米や雑穀を急速圧力で膨らませる機械で 圧縮した直後ぱっと口を開く時の音がポンとひびくから その名前がついた。レコード…樹脂円盤の針の先摩擦によって発声。
- 5 5 P 連鎖劇…あらかじめ外で撮影した画面に 舞台劇を瞬時に場面切り返して見せる劇。当時としては高度な娯楽劇。そげな…そんな。じゃねえ…ではないです。エートンコトジ…やっとのことで。切り結ぶ…剣劇切りあいの場面。ナカメ…その間に。パット…瞬時に。どしてコイサ…どうしても今晚。アリュ―あれを。オトッタンガ…父親が。来ちちよるんかえ…来ていますか。
- 5 6 P こなしち…協力して。上下かる…上の方と下の方から。チョコット…ほんの少しの間。ごちる…ようす。シチョルゴタル…しているようす。ジャガ…ですが。見ちかなりセント…見てしばらくしないと。こんき…来ない。チット…少し。なんか…なでか、なにか。アンシたち…あのひとたち。チットデン…少しでも。がそげな『でもそんな。かけられたんは…舞台に上演されたのは。
- 5 7 P ヤッパ…やはり。ここにゃ…ここには。ハリコミよった…頑張っていた。
- 5 8 P やんがら…やがて。イノコ…湧水がでて溜めてある場所。沈んだ水の中…現在は沈んでいるが 思い出の多かった懐かしい場所。
- 5 9 P まじ…まで。ほんな…それなら。ドベジャネエ…最後じやないまだ後が続く。ホタッタ…捨てた。





五助さんのおしゃべりゃ親シミン中じ 人ん心うクスグル情愛さ
え感じらるる。庶民の苦痛やシイタゲられた長え歴史 それもサラ
リ払拭しちつきあう生活上手か。ジャキ街道を行き来する人たちに
愛され 頼られテンオルンジャロ。頼らるる幸せは物や金じゃ変え
られん 人間社会ん大ケナ宝物デンある。

『コナイダ話^{ヨッ}タヌー 今日はいいじゃろう』『アレナ……雨も
降りで一たきなえ』『ポット引きニージ 流れ出る…何とん言えん
いいナエ』『ソウナ……ウットドゥ ソゲーエ思わんケンド』 若
え嫁ごが気さくに承知しちくれた。好奇心がある男なら いっぺん
グレーハコゲンコツしちみて……それが人間の心情かん知れる。

とにかく承知しちくれたき 昼飯うカッ込むと弾む気持ちう押さ
えち……『いいで 雨も降るし』そん一言が妙に色っぽい。ソゲン
時じネートあんまりサレン事でんある。色白ん若嫁がシチョルヌ
想像しち自分がもうすぐソリュウする…待ち焦がれた気持ちが一遍
に開花するんジャキ。

ヒョイト見るともうソキー待ちよる。『待ちクレタンナー』
『ナンボンデン おらにゃ悪かろうき』『ソウジャー』 雨足
がちっと早うなっち アップアップするごつ水が。『ホンナ抜いで
んイイデ』『これじゃなー』 大けな手じミナクチん石うコネのけ
たら 見る見る水が落てで一た。オンドロが一緒にセマクロウッチ
流れ落つる。水ん流れがミナクチじ肩を放ソウゴタル…じっと見つ
めち満足したんか横に立っちよる 若い嫁ごと顔見合わすと大声
じ 満足げに笑った。『おおきに おおきに いっぺんコリュウシ
タカッタ』『チャーリャ』

五助ん話が途中かるくるり
っと変わった時 皆思わん生唾ぬーじサット引いた血の
気う感じたごたる。それだけ隠れた艶話に魅き込まれた
話芸にゃ タマガッチシモウタが本音じゃろう。



『五助さん起けたなトッパイ食べなー』 顔見知りんしが戻りかけか寄っちきた。『イテツクバルごたる』『何うホゲう言われた』『コンゲンネーワーマクキ』『ホゲジャノー』 オドロクセーもんじゃきセチーナンチャネー。どーくるしがおるかち思うと ズツネエノンオル。ホメクきオトシかるハッタインコをやっち ふうがゆうインダ。

ゆーろがいとーじタゴカシタンカ こん前んヤケハタかセチーやら メンドシイやらチンドロカタじゃねーが モドガルきワーマクッチまどえち言いてえごたる。シャーシーち思うとボクジャ しちくじゅーテンショムショわーまく。アジロシイごつスラゴツ言うな親ん顔が見てー。マツボリウくんなーちくされ言よったんが もうこそと歳暮うもちきた。

幾つ解るな……トッパイ……とーふ。イテツクバル……返事に困る。ホゲ……でたらめ、無理強い。コンゲンネー……この上もなく。ワーマク……騒々しい。ホゲジャノー……でたらめ。オドロクセー……匂い、体臭。セチナンチャネー……情けない。ドークル……悪ふざけ。シガ……人が。ズツネーノン……まとわりつく、雨にずぶ濡れ。ホメク……蒸す、自然体の熱。オトシ……ぼけっと。ハッタインコ……こがし、煎り麦粉。ホウガユウ……気持ちよく、機嫌よく。インダ……帰った。ユーロ……足の裏側部分。タゴカス……筋違いに。タンカ……したのか。ヤケハタ……やけど。セチー……情けない。メンドシイ……情けない。チンドロカタ……血まみれ。モドガル……甘やかす。ワーマクッチ……騒々しい。マドエ……弁償、戻しなさい。シャーシイ……うるさい。ボクジャ……大変じや。シチクジュウ……くどくどうるさい。テンショムショ……真剣に、むやみやたらと。アジロシイ……立派な。スラゴツ……うそ事、冗談。マツボリ……内緒金。クンナー……ください。クサレ……いじわる言葉。コソット……いつの間にか、こそと。

野津原町内で使われた方言ですから今市のもあります。

明治…大正から 昭和初期…戦前 戦中時代

いずれ詳しい資料が出た時い 挿入する事いしち ここじゃ戦前の世の中う覗いち見ろう。まとまった部分だけにしちやります。

生活全般が厳しくなっち戦時色も濃ゆうなつた。こん頃かるあつたんが『村八分』 火事と葬式以外は無視すると言う差別でんあつたが 中にゃどっちにも言い分がある事態も。

甘いもんと言えは黒砂糖 ほけー干し柿が使われ 水飴う作るしもあつち キザラ《三温糖》なんかいいほうじゃつた。麦飯 味噌菜に晩飯あダンゴジルが定版。味噌汁に漬け物んがつきゃーいいほう。葬式ん米飯を楽しむ 大釜んコガレが人気んいいもんじゃつた。

火葬場が柿野にあつた。土葬が多かつたが時折ん火葬にゃ割木を持参する。オンボウが火葬の世話をしてくれた。土葬は組内んしが穴掘りを受け持つ…イケカキち言うがこの仕事をしたしは 御神酒が出た。葬儀の連絡も組内の仕事じ歩いて提灯持参 受けた家は必ず接待の食事を準備した。

戦争が厳しくなり松根油を取る仕事 木炭《バスなどに利用》焼き 軍需工場などに動員されち農家は 年寄り女子供がほとんど。赤紙…召集令状…で元気者は軍隊に工場に。見送る人も出る人も別れの水杯をする。学童疎開 防空訓練 経済取締りも厳しくなच्चやんがち配給制度。衣料切符かる酒なんか祝言か葬式に1升特配だけ。供出もだんだん締め上げられ農家んしも ベイセンキシタ米を食う始末。そん影じけっくしゃオロイーシハ闇取引 タバコ 酒米 なんか町んしの着物と交換しよつた。

横文字使うなち言うにモンペ、ゲートル、ビスケット、アンモニアなんかゆう使いよつた。訳ん解らんまめーにじゃつたんか。

国防献金、国債《弾丸債券》 金属供出《タンスのとりてなど》
隣組、勤労奉仕…若い人たちは軍需関係工場、生産施設、生産現場
に駆り出された。学童は分散授業で神社、寺などで勉強 上級生は
食料生産奉仕。共同作業 モンペ姿とタスキがけで働く そんな場
面が当然となった。

子供の遊びはそこらそんげにある 材料で工面して遊ぶ中から新
しい知恵も アイデアも浮かんで遊び道具には不自由せんじやつた
。竹 木 草 何でん遊び道具 そりーどこん年寄りでん自分の孫
んごつムドガル。怒ってん親は感謝するような環境じ 自然子供ん
体験、情操教育が身に染みついちくる。人ん痛みが解る人間哲学が
備わちくる。

アンモニアを水じ溶かしち麦にやると 元氣ゅ取り戻しち青々。
霜柱うおしたくるごつ麦踏みすると ザックザック軽快なりズム。
モミスリが始まった雪がチラチラ 斗棒かけち俵に詰めこんだぬ
四斗ビョーち言うがピラリ担ぐと奥に積み上げた。甘酒とシャクシ
ナン漬け物 トイモも並んだ米すりんツボサキ。年寄りんくわえた
ばこがゆう似合う 顔んしわが長年故郷ん移り変わりう見ちきた。

メグリ棒じアヤシタ大豆が飛びまわる 豆柄は風呂たきん燃料。
農家にゃ無駄なもんねえき 藁が俵に縄にサンドーラに 筵にも
なりセンチンの潜り戸にも使われた。フセモントコ囲いも出来ち粉
すりんもみ殻が トイモ床に早変わりする。牛馬の飼料になり藁こ
ずみが田んぼじ季節風に震えちよる。

ひびぎれ あかぎれにゃコーヤク焼き込めち言う。痛かろうち思
うなー甘やかしち コボクレ石けんじ洗たくする若嫁ん指先 まっ
赤に染まるぬー見りゃ里の母親 さど辛かろうがこれも宿命か。心
まじゃ貧しゅうならんごつせにゃのや。

みんなひじいんど戦争がありよるきの。



昭和初期から20年代の生活環境

五助さんがん話がちょっと深刻になったんも 無理はねー戦争が身近い感じがするごつなつたきじゃ。田舎も暮らし向きが窮屈になつち 小作んしがお手上げ状態になった。銭がねー『元気が取り柄』ちそれも解るで…でん貧はずひじいもんなねー…ちも言う。年越しが出来んき年の夜は逃げ回る。除夜ん鐘が鳴っちえーと助かったち言う始末じ でーぶん助けられたしもあったんじゃねー。

ところじ 米すりがすんじ俵につむると ホズミっかけち表せんぬつくる。改良議員が検査しち白 赤 青 紫は不合ち言うトットン安い米。サザメっ納めち残りっ売っちそん残りがヒョウロウに。トーラオキにゃほんちと積んだ米俵がいのちきん弦。イモジも買うち貰いださんのう。

ダンゴジルん小麦粉すりん娘が 水車に来ち蜘蛛んエバが揺るるぬー ぼかんち見よるのん やんがちアルクけんど嬉しさと不安が米ん出来が悪いきよきー苦になる。湯沸かしするくどんはたじ団子を焼く 貰い湯じせがわれた夜 イドラん花やらテマリコが好きじやつたあんし 朝草切りじ背のほずある草ん中じ……あげな事もあったぬー思いでーちくる。

よなべに繕うフセモン カマブタブセも上手になつち そげな日がくり返されちイマキ こしまき オコシ やんがちズローズになった。ヘコ フンドシがシャルマタに 紐が引っ込んじしもうち押さえた手が放されん。藁すぐりしよったら割れ目に入ったち 痛えの痛ねーの……大事つくりたてた。

裸電球でん停電になろーもんなら そんな晩なもう灯はつかん。ツボ先いゴザウ敷いちダンゴジルすすり込む。簡単な夕飯じゃが食えるだけいいち 思わにゃ罰があたると。



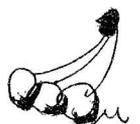
早うチョウチンぬ かんちょうろを 気の効いた家にゃガス灯もあ
ったが。大掃除にゃ区長と駐在巡查も来る…検査に通らんとヤリナ
オシ…また次の日にけんさ。カンカン帽子 サーベルん音 シャツ
ポ 学生ん帽子にゃ夏に日覆いがかかる。

根づけ《田植え》取り上
げ《収穫》シノウ《取り上げ 脱穀》がすんだらほっと一息。じゃ
がノシロフミ タウエヨコイ ウロイヨコイ ソボサン 雨乞いと
88の手がいるかる米の字が出来たち言う。手間がい 道つくり
井路普請 水番 時間水なんかも 米つくりん役割。

『食べたな』『植えるかえ』『洗うな』『使うな』『しょわーね
えな』『いつでん言いなーえ』一言が心のこもった温かみある
心くばりん言葉。相手をおもいやり幸せを念じちよる。相手がよい
なゝ自分もいいきなえ。『牛見が来た』『卵吸い物でん出しな一』
咄嗟に 機転が効くのん隣近所ん縁。『暑いな一』『寒いな一』
『ふがいいな』『いあんばいに』『うんがいいの一』 自分の事ん
ごつ喜びあう。

『やせうま食うたら盆踊り行くで』『ちよいと待って』若い二人
は賑やけ一。素人演芸も上手じゃつたが踊りも…更けた夜中にゃ
ヨバイが 娘は待つもどかしさと不安も…おやじが割れ木を持っ
ちアガリントに構えちよる。娘は大声じ蛇がおった…タマガッタ
親父がこっち来た拍子に娘が勇しを 裏に回らせた。

野津原《特に本町にゃ》にゃ馬車が12台はずあった。大分まじ
荷物やら材木やら賑やかじ かんたんにゃ野津原ん名前が大手をふ
っちょつた。帰りの馬車が酒屋の前で必ず泊まるのん 飲み屋んし
が馬をテナズケチョツタとか。商売上手。台ばらし 立て棒 湯た
て…なんかは馬車引きの心情が滲むごたる。ナガセ シケ 雷
雪降り 楽ばっかりじゃね一馬車引きにも 苦労は予想以上ににも
あったんじゃね一。人の仕事ゝゆう見ゆるもんじゃが。



民語

復興



はぐま、獅子舞い

八所神社ん神幸祭りにゃ『獅子』と『はぐま』が 加わる。はぐまん柄の長さは2間1尺《約4M》 直径約5Cん樫ん棒 頂きに傘形に馬ん毛を取りつけたもん。こん棒をまっすぐに立てち 回すと頂きん毛が広がっち 傘をヒロゲタゴタごつなる。こりゅ独特ん『はぐま唄』に合わせち 手ぶり足技うよろしゅ 道中を練り歩く祭りん見せ場。

紺の法被に股引き 手甲脚絆のわらじばき 唄い手は羽織袴じ 拍子木う打ちながら唄う。一人が音頭取りゃ 他ん唄いてもこれに合わせち唄う。唄ん節にゃ『繁盛づくし』『和歌の浦』『兵庫伊勢音頭』なんかがある。

源ん頼光がソコデセイハリャリャ 大江山にて鬼人を退治す ヨイヨイヤ それで都が治まる繁盛 エーヤレソレエサトセーハリャリャコリャリャ ハーヨーイトセー ハーヨイサノサ。

正月になれば 門に門松裏白飾り ヤレ 子どもごま打つ 羽根つく繁盛。

7月になりぬれば 同じ7日のうら盆なればぼ ヤレ 白い浴衣で 踊り子が繁盛。

8月になりぬれば 神の降臨で御幸のせつは ヤレ 獅子の白熊でお勇む繁盛。

煙草屋の源七が 親の敵を妹に討たれ ヤレ それが無念の腹切る心中。

もうまゝお発ちなヨイヨイ お名残り惜しゅエイソーレソーレ 花のナー都をヨイヨイ ハリャヨーイヨーイ ヨイヨイヨイ ハリャリャ コリャリャハァーヨーイトセー ハーヨイトサノサ。

お江戸日本橋 揉んで出る白熊 あれはナーお大名の伊達白熊

さても見事な お江戸の道中は 松にナー柳を植え混ぜて

瀬田の唐橋ゃ 唐金疑宝珠

松が繁りて 屋根間が暗い 下ろせナー小松の一の枝。

ひょうごつきしも ながつきそめて いつもおろかやオリャ
ソラもうりしゅうの ハリキヤヘトコセ セーノヨーイヨナ
ハレッサ コレワイサ ハヘヨヘイトセ ハーヨーイトセノセ
。

白熊伊勢音頭

伊勢にゃ七度ヨイヨイ 熊野にゃ三度エートコセトーコセ
愛宕さまにはヤンレ 月参り エーサァサァヤートコセーノ
ヨイヤナハレワイサ ヨイ コレワイサ ハーヨーイトセ
ハーヨイトサノサ。

安芸のナァ 宮島周りが七里 浦は七浦 七表

主はナァ 三夜の三日月さまよ 宵にちらりとヤンレ 見た
ばかり

思うてナァ 通えば千里 逢わで帰ればヤンレ また千里

思うてナァ 来たのに去れとはなにか 秋の田をこそヤンレ
稲と言う。



絵に書いた『カニ』が逃げた

竹田での会議じ遅うなった。一華和尚さんが近くん宿に泊まった。部屋に入っちヒョイト。立っちよるツイタテを見ると、宿ん主人が『立派なツイタテじゃろう』ち、自慢顔じ話しかけた。『ジャナ、絵がありゃなおイイなえ』和尚さんな、絵はどげえなち、言おうかち思いよったら、『書いちあげてんイイで』ヨロクウダ宿ん主人な、『すみませんな、ふんな準備させますきチョイト』、『ほうな、ほんな今日履いちよつた、わらじとスミウもって来て。』

不思議に思ったが、すぐに、わらじと墨う運ばせち、何の絵か楽しみにしちよつた。ところがな、わらじにベツタリつけた墨う、そのままツイタテに、サラサラっと、物の見事にカニ5匹が、今にも動きだしそうに書きよる。ジャガこりゅう見た宿ん主人なタマガッチしもうた。あぶねえ引っくり、返るかち思うた。

『こりゃー何な、大事なこんツイタテに、わらじじ絵を書くなんか』ち、腹たちマギリイ、オラビマワッタ。それを聞いた和尚は、『そうな、そげえ気にいらんごたるなら、カニこすムゲネコサレ、外に出ちドキデン行くがいい』ち、和尚は涙浮かべち、手をポンと叩いた。と、どげえなカニたちはゴソゴソ、そんツテタテかる、はい出した。そりゅう見た、宿ん主人わ、タマガッチシモウチ、『ちょいと待っちょくれ、こりゃー私が悪かったき、こん通りです、もいっぺんカニう、戻してください』

えーと素晴らしい絵ち解った、宿ん主人も『こりゃーわが家ん宝物にします』と、大喜びしち、宿賃もいらぬ、みやげまじ貰うち、次ん朝に帰ったそうな。人は見かけによらんもん、それに自分が無理に頼んじよつち、すぐ断わるなんかは、手前勝手じ、気まますぐるち、信頼ものうなるし、相手かるもアンマリゆうは、思われんじゃろう。

巡りおうた二人も 二度とはあえんかん知れん。とナリヤー一回
でん『大事にした話し方 交際』を 上手にすることが 一番の
得かん知れんこちもなる。相手を大事にするこたー 自分も大事
にしち貰うこちにもなる。和尚さんも又 こき一泊することも
あるじゃろう。宿じ大事に もちなしゅ受けた そげな話もでる
事もあろう』

そげなこち一よろ 宿ん宣伝にもなるかん 反対に評判が悪い
そげな 結果にもなるかん知れん。人は日ごろ往生ち言うが 心に
やさしゅう人を大事にする そげな気持ちがありゃー もう世の中
うまく行くもんじゃがなえ。和尚さんが帰り道ん 温見まじ来た時
どしたんか 道にまようたシガ立ち泊まっち 考えよる。

『どしたんな 具合でん悪いんな』 人に話しかくるんが好きな
和尚が 『いえ あら済みません 心配かけて ちよいと道を間違
えたごたるが』 『そうな どこに行くつもりな』 『こりゃ お手数
かけます 久住に行く予定ですが』 里んシジャネエ言葉使いに
和尚は丁寧に教えた。

『久住ならチット方向がヘネたけんど ちっとヘモドッチ 私も
帰り道じゃき 途中まじ連れなおう』 『ですか そりゃまゝ済みま
せん』 旅は道連れとか ゆうしたもんじ 迷う人ありゃー教える
人ありん世の中。今来た道をヘモドルト 今市に向こうた。『ここ
にゃはじめちですか』 和尚も言葉使いを 気を使うち上品に。

『一度キタンじゃが いつとき来んじゃつたき』 こんだ旅ん人
が覚えた 方言ぬ使いでた。『あんた方言がうまいな』 つれ
こまれた 旅の人も『そげなこたーねえけんど』 『いやー上手負け
たな』 『りやー そげ言われると困るな』 『ふんとは近所んし
じゃねえんな うまい』 二人は顔合わせち 大笑いしよったら
こっちさね来るしも 笑いよる旅日記でんあった。



『鬼の目にも涙』

日陰をよけてワラビ取りをしていた 良ちゃんが崖べらを回った時だった。何か泣き声が聞こえるような そんな気がしてならないので 腰をのぼしてあたりを見回した。けれどほかに人がいるようでもない 良ちゃんは毎年くるので よく取れる場所を知っていたので こそっと一人でここに回ったのでした。知らない人たちは小さいのが 一杯の場所を取っているのだから 良ちゃんがここにいるのには 気がつかないのです。

また腰をかがめて大きなワラビを 取ろうとしたその時でした。小石が一つコロコロと転がりながら 草原を落ちてゆきました。じっとその小石を目で追いながら 見つめました。その時です あの泣き声がまた聞こえてきました。じっと石の落ちた下の方を見つめると 吃驚しました。石が落ちて行くその下のほうに 誰かいるのです。

じっと見据えていると動きます。『もしや誰か』 良ちゃんはじっと動くその姿を見て また吃驚しました。そこには可愛い着物を着た娘がいるよう。良ちゃんはワラビ取りをやめると おそろおそろ草原を下の方に 下りて行きました。泣きながらじっとしている 『もしかしたら怪我でもしているのでは』 足もとに気をつけながら やっと側まで来て見ると その娘も気がついたのか 又大きな声で泣きだしました。きっと助かったと子供心にも 思いが回ったのでしょう。怪我をしているようです。

優しい声で『大丈夫よ とうしたの』『……』泣き声が止まりました きっと安心したのか。このままでいたら死んでしまうのではと 思っていたのかも。『もう大丈夫よ』と笑顔見せて側に寄って行きました。

側によってよくよく見ると　あまり見たこともない娘でした。じっと頭から足先まで見ました。足に怪我をしたのか血が滲みでています。『ここけがしたんだな』　良ちゃんは手さげから　リバテープを出すと　その娘の子の足に張ってあげました。じっと見ていた娘もやっと　落ち着いたようで　涙に濡れた頬に　笑顔が出ました。

『よかった』　良ちゃんもほっと安心。でもこんな娘の子がこんな所に　あたりを見回したけれど　誰もいないようで。『一人で来たの』『…』『どこから来たの』　と　娘は天を指さしました。『まさか……』　もしや頭でも打つて…　いろいろ考えながら　『でもそんな事は考えまい　可愛いそっだから』　良ちゃんは自分にそう　いい聞かせて　あたりを見回したが誰もいません。そのはずです　良ちゃんはいつも人の知らない場所で　こそっとワラビを取っていたのです。そう思うとおかしくなって　クスクス笑いだしました。

それに釣りこまれるように　その娘も笑いだしました。顔を見て良ちゃんは　ほっと安心して嬉しくもなりました。きっと誰かと来て待っているのか　はぐれたのか　いろいろ考えましたが　とにかくこの子が落ち着くまで　待ってあげようと思いました。と　その時でした　急に空が曇ったかと思うと、風がサーッと吹くと空から何か　目の前に現れました。

急な事で良ちゃんも覚えていません。でも確かに何か大きな者が……とその娘をそっと抱き上げると　すーと空に舞いあがりました。娘は目に涙を一杯ためて　『ありがとう』　『ありがとう』　その声がだんだん聞こえなくなりました。

ふと気がつくと良ちゃんは　ワラビを取っていた元の場所に　チョコント立っていました。目の前には涙浮かべたあの娘の　顔だけがいつまでも残っていました。

愛宕城に迎える義経の夢

康平5年《1602》大神季定が築城して以来540年あまり 慶長5年《1600》焼き払われるまで 全盛を極めた城跡で 宿場町野津原ん中心部が 一望に眺めらるる。源平合戦の後兄に追われた際に 豊後武士団が岡城に迎える 途中休憩場所としち築城したち…言う節もある夢とロマンの 物語りも残る。

三面を赤坂川を巡らせち 南は断崖に守られた堅固な 場所じ城ん構築に何回も失敗しち 祈願しちもろうち人柱に孝女キクと鷺を 立てたかる別名 『鷺ヶ城』とん言う。戦国時代にゃ行政ん素晴らしい行き届きじ 仕向武士が熊本やら 長崎やらに出張した説もあった。

九州ん北部ん一つん要としちの 存在感もあったごたる。西方に武家屋敷跡も残り 城主得度後ん寺院もあっち 当時を忍べば 城跡ん僅かにのこる遺跡に 聞かるるもんなら何か 語っちほしいものでんある。古いい時代ん人間の 生き方過ごし方は今も追憶され 語り草にもなっちよる。

あん時に義経を迎えたんなら 故郷んあり方もまっと 変わったんかん知れんが 哀れなり血肉別けてん 時の政争にゃ厳しい掟も あったんじゃろう。武勲は無駄には ならんじゃろうが あまりと言えばあまりにも むごい話でんあるごたる。期待しよった若い娘たちん 仄かな願いは露んごつ消え 描いた舞台はそんまま 閉幕になったんは クチオシイ事じゃった。

時代が変わっち周りん池に ボート浮かべた遊園地構想が ちよいと浮かんだがそれも シャボンダまんごつ消えち オシナギイこちなった。運たぁそげなもんかん知れん。じゃがそれも又 ヒョイトスリヤ よかったんかん知れん。それが巡り合わせん世の中じゃろう。ハガイイケンド。

天狗と約束したに負けた 宇曾ん鬼は反省しち よそに出ち行ったが よそに行ちみると 今まじゃチットグレナラ みんなもあんまり 言わんじゃつたもんが よそじゃそげな事あとてん コラエチモ くれんもんじゃき ちっと『熱が出てん』 知らんふりしちよる。

いままじ近所んしが心配しち いろいろシチクレタンガ もうナサケノウナツタ。がそれも自分がん 身から出た錆びでんある。初めち住み慣れた 宇曾ん里が一番似合うちよる ち気がちいたもんじゃき やっぱ里心がち一た。

ある日村ん入口まじ来たが なんさま腹がへっちしもうた。そき一ござちよる お地藏さんにウマソウナ ダンゴが供えちやるんが目に入った。『たべたいのう』ち 手を出そうち思うた。と そんな時じゃつた。どこからか蜂がツージ来た。そりゅう見た里んシタチハ 『ありゃ こん鬼はここじ 皆んなをコナシよった鬼じゃな』

『悪い所う見つかつた』ち 思うたもんじゃき たまがっち せんハズミ前にツンノメツタ。石段に『頭をごつん』 『あ痛えしもうた』 そんな声があんまり 大きいもんじゃき 道を通りよるしが立ち止まった。人がいっぱい集まっち来ました。『あん時ん鬼で』 『なにえなにえ』 じゃが考えちみりゃムゲノコサレ。

側に近寄ると『やっぱ七瀬ん里がいいじゃろう』ち 言われました。こげえ優しく迎えちくるる こん里が自分のおる場所ち しみじみ解つたようじゃつた。それをじっと見ちよつた 天狗も『どうやら反省しちよるな』ち 気持ちを汲み取つた ようじゃつた。でもこのまま甘やかすな ゆうなかるう。いっときこんまにシチョコウ。知らぬふりしちよつた。

そんな時じゃった どうやら火事んごたる。煙りがモクモクあがりよる。『早う加勢に行かにゃ』誰かが大声じ ひれを聞いた鬼は 『ふんとよし 俺がはりこまにゃ こげん時お返ししゅう』ソバにあったムシロ引き寄せち 水にザブンつくと 頭に寄せち一目散に走った。火事場は近いごたる。

あっと思うまの出来事じゃったか 早かったき大事にならんじ消えた。鬼も『役にたったごたる』ち ほっと胸なでおろした。

『こん前ん火事ん時にゃ あん帰っち来た鬼がとてん 活動したんと』 そげな噂が広がったもんじゃき 天狗も嬉しかった。『あん悪ぼうじゃった鬼じゃろうか』『反省したんか』勝手に話すのを聞くと天狗も 『そろそろ迎えちやろうか』ち ある晩に呼び寄せた。

『皆んなも喜んじよるが 帰ったらどげ一か』『…………』鬼も嬉しかった。が ここじソんなラちじゃ あんまり勝手によすぐる。『考えさせて』と いっぺんは断わったが 皆がんながそんな気持ちであるならばと 『心入れ変えて』と 心から反省した気持ちを示したので 里の人たちも大喜び。

里には天狗やら鬼やら 人間社会ん中じ仲よく助けあっち 住むこちなり久しぶりん 楽しい里に戻ったごたる。世の中にゃ誰一人いらんもんはない。じゃき助けあい人んために 役立つ事をそれぞれがするんが 一番いい事ですから 鬼もそんな仲間にもまたヘモドッタンデス。

『お水が出そうじゃき 加勢頼むで』『いいで俺に任せて』元気を取り戻した鬼は 今日早くかるハリコムき 皆から真剣頼りにされちよる ゴタル。そげな風景をみると●皆んな笑顔になっちもう。

方言説明

- 67P こん…この。ヒロゲタゴタル…開いたよう、広げて。
- 69P ヒョイト…もしかしたら。ジャナ…ですね。イイニ…よいのに。イイデ…よいです、よいから。ヨロクウジ…喜んで。
- 70P ナリャ…できれば。もちなしゅ…接待を。そげな…そんな。どしたんな…どうしたのです。ちよいと…少し、時の間。こりゃ…これは。シジネエ…ではない。チット…少し。へモドッチ…元に帰って。ゆうしたもん…よくしたもので。キタンジャガ…来たのですが。そげなこたぁ…そんな事は。ふんと…本当です。
- 71P こそっと…内緒で、知らぬように。じっと…静かに。
- 73P ごたる…ようです。ならんじゃろうが…ならないでしょうが。クチオシイ…悔しくて。オシナギー…惜しくて勿体ない。じゃが…ですが。ヒョイトスリャ…もしかしたら。ハガイイケンド…悔しいけれど。
- 74P チットグレナラ…少しくらいなら。コラエチモ…許しても。シチクレタンカ…してくれたのですか。ナサケノーナッチ…情けなくなつて。なんさま…なにしろ。そきーござっちよる…そこに祭られている。ツヘジ…走って。里んシタチ…里の人たちは。コナシヨル…いじめている。ムゲノコサレ…可愛いそうに。シチョコウ…しておきましょう。
- 75P ザブンつくると…水にすっかりつけて。ごたる…ようです。こん前…この前は。どけーか…どうですか。ここじソナラチ…ここでそうですかと。ハリコム…熱心に働く。ゴタル…そのようです。

民話にゃ古い物語が 伝承には夢とロマンがあっち そんな話を出来るだけ残し 伝えたいち思います。優しい心が通うそげな 話があるち言うんは 幸せな故郷と思います。



野津原方言單語



『方言単語』のジャンルですが 野津原地区で使われる 結構
難しい方言を並べました。必ずしも方言じゃないかも でも難問
でもよく見ると案外 無意識に使う事があるのでは……イロハ順

アゲンコツウ…あんなことを。イイツノル…無理に言い張る。
ウッタツル…余分に上に乗せる。エグウジ…喉を掘るような。
オリャセンジ…居なくて。

カリスケ…調子者で。キシル…精液。
グツニューウ…今ひとつ歯切れが。ケダリー…すぐ間に合わせぬ。
コヨセチ…側にかき集めて。

サンドーラ…俵の中蓋。豚
シレット…冷ややかな目で。スパユル…乳が流れでるよう。
セバギレ…横車を。ソクー…そこを。

ダッチョル…疲労して。
チシマワス…叩いていじめる。ツクレン…あまり役立たず。
テショウ…小皿。トッパイ…豆腐。

ナジュベ…言葉巧みな。
ニロウジ…睨んで。ヌリー…遅い、ネロージ…ねらって。
ノグソ…野原での大便。

ハダクル…仲間はずれに。
ヒダリー…空腹。フツモチ…よもぎ餅。
ヘノツッパリ…役には立たない。ホラケー…粗雑な壊れやすい。

マンナコ…真ん中を。ミチョキヤ…見ていると。
ムチャキ…牛馬を追う時の鞭を正月飾りで焼く。
メンドシイ…恥ずかしい。モタツク…慌てて取り乱す。

ヤラト…少しも。ユルット…ゆつくりと。ヨキー…よけて。
ラツシモネエ…予想以上のまずさ。リクツンカオ…理屈っぽい。
ルーズルベツタリ…決まり悪い動作。レンコンクウ…見通し可。
ロクシュモネエ…尋常でない態度。ワキヤガル…騒動しい。

半分以上が解れば上級では 今はあんまり使いよらんきです。が
咄嗟に飛び出すんが 方言ですき可愛いがっちょくれな。それじゃ
No.13号ん続きになるけんど 『く』の項 『ミ』からです。

クミメートシラン……組んでも知らない、汲んでも知らないから。
クミバンジャキ……汲む当番じゃけれど、組の当番になったから。
クミトータル……組みたくなるんで、汲みたいけれど大丈夫。
クミタメチ……汲みためて非常用に、汲んでおけば咄嗟に間に合う。
クミュー……組を、組分けの準備をせねば、組みを作るが大変。
クムメートン……組むまいと自由だから、汲みたくないなら勝手に。
クムコタァネェ……汲まなくてもよいので、組まなくても勝手。
クムキンゴタル……組む気持ちのようだから、汲む方法がついた。
クムニャイイコロ……汲むのには一番のてっきのよう、酌み交わす。
クムチュウキ……汲むと言うから自由に、酌みたがるから。

クムマジャ……汲むまでは詰断がならぬ、組むまでは壊れる予想。
クムンカ……汲むのですか、組みますか、組んでもよいですよ。
クメチョリャ……汲んでいるようです、組んでいるようだから。
クメルルカ……組められますか、汲んで帰りのようですから。
クメタナテガラ……組みが出来たのはすばらしい、汲んだのは手柄。
クメメートン……組みが出来なくてもなんとか、汲むのは至難の技。
クメテンクムナ……汲めても汲まないがよい、組みたいでも遠慮。
クメンゴタリャ……組めないようなら、汲むのが難しいなら。
クメンシタカ……工面ができましたか、苦勞の甲斐があったよう。
クメレン……汲むのは難しい、組めれないようだから。

クモネェ……苦にはならないが、苦勞はしないから、楽々だから。
クモリャモウケ……曇ったら雨の予測、曇れば枯れずに。
クモウチオムウ……汲みたいと思っている、組むから心配ない。
クモワアサガイイ……蜘蛛は朝見ると縁起がいい、朝蜘蛛に夕百足。
クモリャコス……曇ったならば大丈夫、曇れば根づくから。

く クモロート……………曇っても、曇ってきても。
クモウドチ……………組たいものだから、組みあうのが楽しい。
クモッテン……………曇っていても、曇ったけれしど。
クモモンナラ……………汲むようなら、組みあったなら。
クヤコスワカル……………食べてみれば善し悪しが、試食して。
クヤララクヤラ……………苦にしているのか楽なのか。
クヤクンラクミ……………苦役の日は楽な一日、苦役で生き抜き。
クヤカニュートウ……………苦役の日は入湯気分、苦役の楽日。
クヤカ……………苦役は、苦役の日はのんびり出来る。
クユルチュウテン……………壊れると言うが、壊れるなら補修を。

クユルトコマル…壊れると困るが、崖崩れにゃ用心せんと。
クユンナ……………壊れるな、崩れ落ちないように。
クユンナチオモウ……………壊れないように願っているが。
クユリャツクロエ……………壊れたら補修を、壊れぬ先の補強を。
クユルソベ……………壊れる側は危険、壊れるのを確認して。
クユルソバカル……………壊れる側から、壊れるのに無理に使う。
クユルゴタル……………壊れるようだから、壊れる前の検査。
クユリャ……………壊れるようなら、壊れたらすぐ補修を。
クヨウコス……………供養こそが残った人の務め、供養大事に。
クヨウオドリ……………供養する意味の踊り、盆踊り。

クヨリャラクガ…苦労より楽がいいが、苦より楽になって。
クヨウシタンカ…供養をしたですか、供養祭りがよいから。
クワンドル……………鍬の泥を洗い落として、使ったら手入れを。
クワンドチ……………食わない事になったら、食べれないよう。
クワレチ……………食べられるようで安心、たべれば満足。
クワンナランキ……………食べないといけないから、生活が。
クワレンコタネエチ……………食べられない事もないが。
クワンズ……………湯わかし設備、銅壺、湯沸かしの鍋。
クワレチョケ……………食われたふりをして、うまくごまかす。

苦役…団体で作業する仕事で 農村では、井路の修理清掃、道の補修などの他 祭りの準備、かたづけ 会場づくりなど。
区役…地区の役職 肝いり 班長 係 などの共同体の世話を
する人たちの分担で 年季で交替や名誉職などもある。
口役…司会進行ナレーションなど 特殊な技法の持ち主が 担当
する場合が多い。

クワンス…土塗のくど《竈》に取りつけられた 銅壺《ドウコ》
で 両側の料理などに 火を燃やすと中にセットされた
ドウコの湯が自然に沸く仕組み。牛馬に飼料を与える時
などに使い 後かたづけよう 掃除などにも利用出来る。
冬の洗面用、手足を洗い用などにも 使われる生活の知恵
道具。

クワンバチ……食い損なうかもしれない、食はずれ、食えない。
クワンナルメ………食べなくてはなるまい、食事にしまよう。
クワニャコス………食べなければこそ、食べる為の手段だから。
クワルリャイイガ……食べられるといいが、食事が満足に出来て。
クワレンコタァ………食べられないことはないが、食べられます。
クラガッチ………暗くなって今にも、雨になるのでは、曇った。
クラクラスル…目まいのような、気分が高ぶって、気分的に悪い。
クラスミデン……真っ暗闇のようでも、暗い場所でも、暗くても。
クラスリャ………叩き回して、叩いて苛める、ひどい目に併せる。
クラスミン………暗闇のような、真っ暗な場所に、暗くなった空間。

クラスド………叩くど、ひどい仕打ち、陰湿な苛め、悪質な暴力。
クラガリン…暗闇の中で、くらい場所での、暗い場所のいたずら。
クラガッチ………暗くなって今にも、一雨来るのでは、急に暗く。
クラビー………比べて見ては、比べてみると。
クリュウト………くれるとも、頂げるかも知れないが。
クリーチ………下さいと、頂いてもよいので、ください。

く グリンブンカル……………回りの分から、周囲の分から。
グリュウコス……………周りこそ、周囲をよくせねば。
グリュセニャ……………周りをよくしておかないと、周辺が大事。
グリグリ……………しこりが、手に感触が伝わる、手障りがある。
クリュウトン……………くれたとしても、頂いたけれど。
クリクリユウナ……………くださいいませさいなど言わない。
クリュウワレ……………固まりを砕いて、固いのは小さくしておく。
グルット……………周りいったいの、周囲を見回す。
クルット……………後ろ向く、急に回転する、あたりを見回して。
クルリャモラウ……………頂くものならもらう、くれるのなら。

クルワレタカ…叱られたの、叱られたのは、理由があつての。
クルットヘモドル…急に回って引き返す、急に帰って来た。
クルシュネーカ……………苦しい事はないの、窮屈ではない。
グルリン……………周りの、周りいったいの、周辺の異常は。
クルウ……………叱る、怪しげな行動、異常な様相になって。
クルリャ……………くださるならば、頂けるなら、くれるのなら。
クルワルル……………叱られた様相、叱られる程のいたずら。
クルワレチ……………叱られて、失敗したので、取り返しつかない。
クルーチ……………叱って、叱責する、失敗をくり返さないように。
グルグル……………固まりが解る、しこりの感触が、規則よく回転。

クルワレテーカ……………叱られたいの、失敗したの解った。
クルルンカ…くださるのですか、頂いたのです、くれたです。
グルリグルット……………周り一帯が、周辺全部が、あたり一面に。
グルグルマキ……………厳しい巻きたてに、しっかり巻包んで。
クルリャモラオウ……………くれるのなら頂く、もらえるなら頂く。
クルンニコトワレン…くれるのなら断われない、親切無視は。
クルシモイヌルシモ……………来る人も帰るひともある、行き来が。
クルチイヨッタ……………来るからと言っていた、来るようです。
クルモンジャキ……………来るようですから、くるのに断りは。

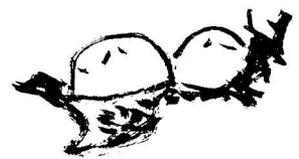
端午の節句

5 節句の1つ行事としち 中国じ厄よけん意味かる 400年頃
かるの風習が 奈良時代に伝わち『節会…セツエ』ち 言い宮中
ん年中行事になり 平安時代にゃ天皇が 武徳殿じ邪氣払いをし
ちよつたよう。鎌倉時代にゃ尚武《ショウブ》ん催し 江戸時代か
るは男子ん出生を 祝う日になった。柏餅を献じ玄関前に 幟飾
ったち言われる。

一般庶民家庭でん 軒端にショウブを差し ショウブ湯入っち
祝いんチマキや柏餅う 食べち無病息災を願った。それが継承され
ち続いたが 所により風習が多少左右もしち 形がチットズツ違
うんもあるが 願う所ん気持ちは 同じじゃあるまいか。チマキを包
む葉っぱでん 柏餅に敷く葉っぱでん 香りと殺菌効果もある。よ
う使うカンカラ《サンキライ》も そんなま食べてん食わるる。

く グレソウモネエ……頂けないでしょう、暮れそんにもない。
クレンナエ……頂けないですね、貰えないかも知れない。
クレドキジ…暮れるころになって、忙しいのですが、貰えぬ。
クレチカルデン…貰ってからでも、頂いたなら、暗くなって。
クレタナワスルンナ…貰ったのは忘れない、感謝を忘れない。
クレントキャ…貰えない時は、頂けない時は、暮れない時は。
クレメーカ……貰えないかな、頂けないでしょう、無駄骨か。
クレンカン……貰えないかも、頂けないとすれば。
クレタンカ……貰えたの、頂いた、暗くなったの、貰えない。
クレンサキ…貰わない先に、貰ってからでは、どうせ無理か。

クログロ……周り一面をよくしないと、すみずみを綺麗に。
クロウジ……暗くてどうも、苦勞しているが、苦勞も樂の前。
クロウナッチョル……暗くなって、とっぷり暮れたら。
クロウシタキ…苦勞したのだが、当たり前と思えば、苦は樂。



く クロウシチョル……暗くしている、苦勞したのでは、苦勞人。
クノウチ…周りや隅を耕す、暗くて、飲みすぎて、悪態飲み。
クローチカル…悪ふざけな飲み方、悪態な飲酒、嫌われ飲み。
クンズキャ………うつむくと、下向いて、真剣見つめている。
クンナチ…来なさんな、来ないでほしいが、来るのを嫌われ。
クンニオラニャ…来るのに留守しても、来るから待っている。
クンヌコトワレン…来るのに断わられない、来宅拒否も無理。
クンノカ………来ますか、来るようなら、来るなら待っている。
クンズクトアブネ………うつむくと危険、下向いていると危険。
クンジミヨ………汲んでみては、組んでみれば、組合せが大事。

クンダンナショワネェ…汲んだのなら大丈夫、組んだらよい。
グングン…すくすくと伸びる、早く走って、成果が期待され。
クンノ………来ますか、来るようなら待っている、来るなら。
クンナラ………再会楽し、来るなら、来るようなら待っている。
クンジョケ………汲んでおけば、組んでみたら、組み合わせの。
クンジイチ…汲んでおいてください、汲んでおけば間にあう。
クンダリ………下向きに、下り坂、序序に下って、さがって。
クンクン………変な香りが、においがする、嫌な匂いがするが。
クンナア…………ください、貰ってもよい、頂きます、頂戴。
クンニ…来るのに、来たいと言うので、来るのなら仕方ない。

け ケアゲチ…けり挙げて、足で蹴りあげる、ひどく蹴り飛ばす。
ケアノーミル…………毛穴を確認する、毛穴にささって。
ケアグリャ………蹴りあげると、ひどく蹴りあげ、激しく蹴る。
ケアギー…………蹴りあげ、酷く蹴り挙げて、蹴りあげる競争。
ケイキャドゲェナ…………景気はどうです、調子はよいですか。
ケイクッシヨエ…………稽古をしていますか、稽古を真剣に。
ケイレルルカ………帰りますか、帰れますか、帰れるようなら。
ゲイモヤキタツ…………芸は身を助けて、思わぬ助け船。
ケイツクレン…………役にもたため技、たいした言い訳ですが。

け ケータゴタル…貸したような、書いたように、消えたように。
ケータマツチョル…黙っていないさい、静かに黙る、沈思黙考。
ゲーラングモ…女蜘蛛、大きな美しい蜘蛛、目立つ蜘蛛。
ケータ…貸した、書いた、奇麗に平坦にならした、整備した。
ケーツンカオー…つまらない事を、予想もつかぬ思い付き。
ケエタナモドセ…貸したのは戻しなさい、貸し借り決済。
ケエジョケ…嗅いでおきなさい、欠いておきなさい、嗅ぐ。
ケエツマラン…全く役立たぬ、任せられない、用事が無理。
ケエタブンナ…貸した分は、貸したものは返して、貸した分。
ケエタエ…消えたのですか、貸した分、貸したはずです。

ケエチャリヤ…貸してあれば、消えていれば、貸しましょう。
ケエチョキヤ…貸しておけば、貸せば返すでしょう。
ケエタキ…貸したから、貸した分は返すこと、返済条件。
ケエチャレ…貸してやれば、貸しておけば又借る事も。
ケオナズリヤ…毛を触って見る、毛の繕いも、毛の手入れ。
ケオソリヤ…髭剃りも常識、髭くらいは手入れを、美顔。
ケオッチョケ…顔剃り技法も上品に、顔は心を表す。
ケオルンカ…毛織物づくり、毛織細工の技法、毛織服まとい。
ケオヒンニギル…毛の感触を確認、手入れが美しさを左右。
ケオヘネグル…毛触りの手入れ法、身嗜みの一番に。

ケカカリヤ…蹴りかかれば、用心して防御も、正当防衛。
ケガマジヤ…怪我までして、怪我には用心を、無事故が。
ケカケチ…蹴り掛かって、乱暴な相手には用心を。
ケガルリヤ…汚れが品位にも関わる、清潔第一に。
ケガスンナヤ…怪我をしないように、危害予防大切に。
ケガサスンナ…怪我をさせないように、怪我をさせては。
ケカクリヤ…押しかけ喧嘩は暴力、話合いが常識じゃが。
ケガマジヤ…怪我までは、卑劣な付き合いは儲けにゃならぬ。
ケカカッチ…蹴り掛かって、悪どい性格にゃご用心。



同じ方言でん上、下、に続く言葉 話し方じ 意味がで一ぶん
変わっちもくる。じゃき又エエラシインカン。慌てち早口じ言う
と勘違いしち トテツモネエこちもなる。

クレ…暮れた、貰いたい、土ん固まり、なんかに分けれるるき
確実に聞かんと思わぬ 誤解も招くこちなる。

クム…組む、汲む、汲んでもいいですか。汲ませてください。汲
みに来たと思いきや 組合せん相談に来たらしい。組んで
1等賞取りたいなえ。組むと早く終わりそうじゃき。汲ん
だ水は本当に美味しいから。汲むんはいいけど 組むな
苦手じ。

クルル…頂けますか、暮れるのですか、貰えると思った 日暮れ
が近くなった 暮れたようで、貰ったんです。『貰ってよ
いですか』と『貰った』の2つにも使える。暮れたの場合
も『暮れそう』と『暮れた』の 2つにも使える。

クンナ…ください、来ないで、来ては困る、頂きたい、などにも
上に戻る言葉によって 『そん苗クンナ』『お前はもうク
ンナ』と まったく異なる意味に 結びちーちよる。

※ クレンゴタリヤ《貰わない、もちっと続けようか》 モラワ
ナイトと 暮れるまで。クレテン《もらえるなら》《仕事は
続ける》クムコター《組んでもいいが》と『汲まなくても』
にも別れる。などと言葉たゝ 土地ん人たちん心が入り込み
優しい 情愛がこめられると 大幅に移り変わって 使い方
も多種多様に広がるごたる。

け ゲローデン…ろくでなしでも、嫌われ者でも、役立たずでも。
ケギライニャ…性格が合わない、嫌われる振る舞いの人。

け ケギロウテン……何んぼ嫌っても、特別嫌いでも、違和感が。
ケクリカエーチ……蹴って倒してしまう、乱暴な振る舞いを。
ケクウダント……蹴って飛ばしてしまった。乱暴な仕打ちを。
ケクウジシマエ………乱暴に蹴ったりする、酷すぎる乱暴。
ケクウダンカ……蹴って乱暴に仕打ちする、乱暴な態度には。
ケクデンワカルメー………蹴飛ばした仕種はいずれ解るもの。
ケクシャワリイ……結構悪遊びする性格、乱暴な振る舞いは。
ケクネチシマウ……乱暴な仕打ちにあきれて、悪どい仕打ち。
ゲゲナケ………高い声で泣き叫ぶ、大声で泣きわめく。
ケゲライスル………嫌われ者の代表格、仲良しこそ幸せ者。

ケコロガシチ………蹴ったり転がしたり、乱暴に遊びまわる。
ケコンジ………蹴って飛ばしてしまう、乱暴な遊びにあきれる。
ケコガリアスブ……蹴ったり転がしたりして遊ぶ、乱暴な遊び。
ケコズリヤ………乱暴に遊んで怪我をしたりする。
ケゴセンゴツ………怪我をしないように遊ばないと、息災に。
ケゴスンナ……怪我しないように、怪我しては遊びにならない。
ケゴジョル………かがみ込んで、うずくまってしまう。
ケサマジャ……今朝までは、元気者がどうしたの、健康第一。
ケサドマ……今朝などは、今朝は元気で、今朝の張り切りよう。
ケサガタ………今朝の夜明けには、早朝は元気印で。

ゲサキー………下品な、醜い表情で、みっともない風体。
ゲサキーノヤ………げひんじさなあ、みにくい格好ですね。
ケザリー………気分的に疲れた姿、疲労が重なったのか。
ケサマジャ……今朝まではとても元気に、どうしたのかな。
ケサルリヤ………消されるものなら、けされるならば消して。
ケジメクセー……燃えているのでは、変な匂いで気がそぞろ。
ケシゴマネーカ……消しゴムはないですか、消しゴム貸して。
ケシタンカ……消したのですか、消えたのかな、消えたかな。
ケシチョケ……消して下さい、消しておいて、消したほうが。

け ケジラミュ……毛につく虱にゃ用心、不潔じゃ虱もわくど。
ケシワスリュウゴタル……消し忘れにゃ気をき、火の用心。
ケシカキ……消しかけたがもいちど、消したか確認しなさい。
ケズツチョコケ……削っておく、削りなさい、削る作業を。
ケスグレハ……消すくらいは簡単じゃが、消した跡の確認を。
ゲズジャコマル……にせ物の山芋じゃ困る、類似品があるから。
ケズリャヤキタツ……削れば使える、削る事で役立ち。
ケズレンカン……削れないかも、削れるとよいのだが。
ゲスンカングリ……根性悪い人間の妬み根性、気回しする嫉妬。
ゲズンジョウ……にせ物の多い、誤魔化されるとあぶ蜂取らず。

ケセ……消しなさい、消してこそ安心できる、禍根を残さぬ。
ケセチュウニ……消しなさいと言うのに、消したが正解。
ケセレンカ……消せないなら、消したが得策たのに、消す事。
ケセルリャ……消せれるなら、消した方が無難、消せば安心。
ケセタンカ……消しましたか、消したようなら大丈夫。
ケセンゴタリャ……消せないようなら、消せないときは。
ケソウトン……消したいのだが、なかなか消えなくて。
ケソケソシチ……うろうろしていて邪魔に、慌てて落ち着かぬ。
ケソウドチ……消そうと思っているがうまく行かない。
ゲゾサレ……思い通りに行かぬ歯がゆさ、予想外の結果に。

ケダリー……きつくだらしなくなって、疲労こんぼいに。
ゲタモチュ……下駄をもつ仲間が必要、楽しみにゃ役者が。
ケタクソワリー……意地悪な、予想外の悪に囲まれ。
ケタクリャナラン……蹴ったり酷い仕打ちはだめ、暴力厳禁。
ケタマガッチ……吃驚仰天になって、恐ろしく驚いた。
ケチャドモナラン……ケチは嫌われる、けち棒は鼻持ちならん。
ケチンナ……ケチは止めたがいい、嫌われては話にならん。
ケチトシンボハ……ケチ棒と辛抱は違う、けちた分は損しよる。
ケチーヒガ……赤字が追いかけて、日頃んやり繰りが大事。

『ケチ』と『だて』…ケチ⇒ケチ棒がよくある。出すこた一手をだすのもいやち言うが くるるもんは げんこつでんいいらしい。ケチはっち皆んなに嫌われると 知らん所じ大損しよる。道普請の日に割り勘になった。『一人分50円で』『ほんな帰っち払うは』組み役も立ち換えんじゃつた。

帰ちかかる持ち行つたごたる。そん時に払つたしは 『ご苦労じゃつたな』ち 帰り際にみやげん包みを貰つた。後から払つた人は 払うたもんの土産は 貰えんじゃつたそうな。こげなふうにチットン事じゃが 大きな損じ信用ん面じゃ 大損じゃろうな。

ケチケチシチ……けちん棒じゃき、欲張りじゃきどっかじ損する。
ケチャドンコモ……けちじゃ孫子がむげねえ、ケチじゃ抜け道が。
ケチラケーチ……蹴って散らかす乱雑な、辺り構わぬ乱暴者。
ケッカイド……予想以上によい、見かけによらぬ掘り出し物。
ケツベラ……尻べら、尻の周り、注目されるので用心はする。
ケツカル……尻が品格も表す、歩く姿の善し悪しも。
ケックバクユウ……予想異常に考えられない事を言う、口汚く。
ケツロク……汚い言葉使いは信頼にも、見かけによらぬ言葉使い。
ケッチラケーチ……蹴ったり飛ばしたりして散らかす、乱雑に。
ケツゴロユウ……下品な言葉ではなしを、品位に関わるような。

ケックシャウメー…予想以上美味しさ、思わぬ接待に、特別料理。
ケツバナシュ……お色気話は嫌う人もいない、脇道にそれぬよう。
ケツンカオ……痛い所を憑かれて、日ごろの生活態度が。
ケッスミ……消した炭の再利用、燃えさしを消して再利用。
ケツロクユウ…おもしろおかしく冗談を言う、悪のないジョーク。
ゲテモン……下品かな食べ物だが、珍味な食品が魅力誘う。
ゲテシチョケ……下駄にしたがよいのでは、雨を見越して。
ゲテハナオ……下駄には鼻緒が切れないように、日ごろの用心。
ゲテカイー…下駄を買いに、使い前がよいので、中ハマ下駄など。

け ケデンミスナ……毛でも見せないように、内緒が似合う。
ケトケトスル…慌てて落ち着かない、気が動転しているのか。
ケトージン……つまらない事を、人間性が問われる、浅学。
ゲドサレ……なにぶんにも役立たず、間に合わない人材。
ケトバシャ……蹴っていじめる、乱暴にいじめて、卑劣な。
ケトジンヌ……つまらない考えの、冗談にも程がある。
ケナミヤ……毛の美しさ、血統がよいので、すぐれた種類。
ゲナンナハリコメ…雇われ者は頑張って、バイトは努力して。
ケナスグレナラ……卑下するようなら、苛めるようなら。
ケナスナツミナル…苛めは人並みではない、助け合う事が。

ケヌイジドケスル…乱暴に脱ぐと風邪をひく、脱いだら大変。
ケヌリヤツ……のろまな性格、落ち着いてゆっくりする。
ケヌゲテン……乱暴に脱げても、脱げてしまって大騒ぎ。
ケヌギユウト…乱暴に脱げても知らぬ、脱げたら着らないと。
ケヌリーキ……もたもたして間に合わない、早くしてはどう。
ケヌグナ……乱暴に脱いではいけない、脱いで品が悪い。
ケヌキャネエカ……毛抜きがあったら、毛抜きが必要だが。
ケネンジャニ…昨年だったのに、昨年の事だが、昨年の回想。
ケネベナオヤユズリ…粘り性格は遺伝か、親に似た粘りの。
ケネンノハナシ…昨年の話だが、昨年を思い出して、昨年を。

ケネンナノヤ…昨年は世話になり、昨年の恥さらし、思い出が。
ケノネーゴツ……まるで何もないような、大事な物がなくて。
ケノナケ……毛の中に輝くダイヤモンド、隠れた鬼は案外。
ケノコタ…毛の事は全く無知で、毛は皮膚を保護してくれる。
ケバツチョケ……頑張っておけば、精出せば凍る間もない。
ケバラニヤ……頑張っこそ成果も、張りこむのは利益も。
ケバルカ……頑張りますか、働いておけば報いもある。
ケバルルカ……頑張られるなら、努力はいつか報いられる。
ケバイイ……毛が美しく眩しい、美しい毛に見惚れてしまう。

け ケビゴタル…煙たいようで、煙たくて苦勞する、煙りは大敵。
ケビユーデン…煙たくても、煙いのですが、煙いのも我慢。
ケビナーコライ…煙たいのは我慢して、煙りのご用心を。
ケビカリャヨキー…煙たいようならよけて、煙たいのは敵。
ケビトメニシム…煙いと目に染みるので、煙りが目に染みる。
ケビユウジ…煙たくても辛抱して、煙いのに我慢する。
ケプトデン…煙たいのだが我慢している、煙害にご用心を。
ケブテケンド…煙たいのですが我慢して堪える、煙害用心。
ケブテナキオツキ…煙たいのは気をつけて、煙害も大敵。
ケブテーナ…煙たいですね、煙たいので遠慮して。

ケブデン…煙たくても我慢もほどほどに、煙害には気をつけ。
ケベルリャハリコメ…頑張れそうなら努力して、精出す事も。
ケベレンカ…頑張れませんか、無理は禁物ですが。
ケボボ…毛の中に女性の性器、神聖な場所であり大切な役目。
ケホドンネエ…評判程でもないが、聞くほどでもないが。
ケホイダノヤ…蹴って抜けてしまう、乱暴に壊してしまう。
ケホイジョル…乱暴にけって壊した、壊すのは簡単だが。
ケマタイイ…股間に見える毛は神聖なもの、皮膚の保護役。
ケミー…煙たいので、煙たい有様で呼吸器の用心を。
ケミテーガ…煙たいでしょうから、煙たいのでしょう。

ケミトデン…煙たくても、煙たいときは用心を、煙害注意。
ケミナ…煙いですね、煙害にご用心を、火災にも気をつけて。
ケムリン…煙りの中に、煙りは煙害にもなる、煙りの現象。
ケムトデン…煙たくても空間に絵ができる、煙りの芸術。
ケムウジャ…煙くてもどうにもならぬ、しばらくよけて。
ケムクジャラ…毛が多すぎて見ごたえあり、毛の芸術品。
ケムリュメニシマセチ…煙りが目に染みる、眼病の用心を。
ケムタカリ…煙たい様なら敬遠したがよい、煙害用心。
ケモサビー…毛も寒いのは風邪の前兆か、少し過ぎる毛。



あけな
あけな
あけな

あげな こげな話

五助さんないつ来てん おりゃせんち思いよったら 今日珍しゅオルゴタル。忙しゅなけりゃいろいろ 聞きてえが無理も言われんき ジット覗い見たらなんと 『久しぶりん早あがり』ち 笑顔じ迎えちくれた。茶を沸かすごたるき先い ずりあがっち湯飲み茶碗ぬ 出しち『勝手知った家じゃきな』 『あゝいいぐれか済まん ないえ お客さんにシコさせち』

子どもにゃ聞かすんにゃいいかん 昭和23年《1948》にゃ子どもん日が制定されち 記念の『おとぎ列車』が 東京⇒小田原ん間を走っち子どもも デエブン招待されたんで。こん頃は新聞社ん連絡にも 『伝書鳩』が使われち 新聞原稿を鳩ん足ん管に入れち 飛ばすと本社鳩小屋じ 待って受け取る方法じゃつた。

ところがじゃ こん伝書鳩が事故じ 飛びよる途中じ死んでしもうた。ムゲナカッタで ふんと。それが新聞に載ったぬう 丁度そん時に用事じ東京におった 野津原んしが新聞を見ち あんまり可愛いそうじゃきち詩を書いち 巡回文庫じ世話になりよった大分図書館長ん 山室さんに話したらこれまた 懇意にしている放送局の 児童合唱団の指揮者の 杉田先生に話たらなんと その詩に曲をつけち大分放送局かる 電波にのせち放送しちくれたんと。

香るたちばな 鯉のぼり
お伽の 汽車が走ります
楽しいお話 一杯抱いて
可愛い鳩さん 空を飛ぶ



でも悲しい事になったのです。
歌を聞いた人たちからも 沢山
お手紙が来たそうです。鳩さん
もきっと 喜んでいることでしょう。あれからもう 68年も過ぎ
ましたが 当時は立派な働く 新聞社の社員だったのです。

それかる22年過ぎた 昭和45年《1970》にゃ 米減反政策が始まっち田植えん制限が。折角ある田に苗が植えられん 悲しい風景があっちこっちに。七瀬川んダム予備調査に入っち こん時にゃ2000年まじにゃ 完成ん予定じゃった。国民健康保険診療所も開設、大分空港も起工式、野津原消防団が全国操法大会で『第2位入賞』に なったんで。どりゃ嬉しいなえ。

次ん年昭和46年《1971》にゃ 野津原幼稚園《当時ひばり幼稚園》の 社会見学があっち まず野津原かる大分飛行場まじバス⇨飛行場じ飛び立つ飛行機を《現在の今津留にあった》ワイワイ言いながら 見た後はこんだ電車じ別府まじ バスに乗りかえちラクテンチまじ。帰りはラクテンチかる⇨北浜まじはバスじ《北浜に港があって大分まで》 別府港から⇨大分港まじ船。大分港かるは汽車に乗って 大分駅かるはバスじゃった。

一日にバス、電車、ケーブルカー、船、汽車 を乗り継いだが 楽しくて疲れなかったそう。そんな代わり保護者は ゆっくりは出来んじゃったそう。じゃろうな どん企画がよかったんか 次ん年も話題になったが 世話が無理なようじゃった。あーもうふんと 話すだけでんダッチシモウタ。

コン年にゃ野津原母子センター開設。今市小学校50周年式典。立木勝知事当選。大分市に長崎屋開店。これから大型スーパーラッシュ。山峰林道開通。こん後に大分空港が開港となった《国東ん現地に》。当時はプロペラ機だったが。

五助さんがん話にゃもう 歴史があっちあらち思いよるとポクットこん頃になったりもう。ふんとジャキ又聞きとう なるじゃわな。山室寿館長さんな 巡回文庫利用じ来てくれた事も あっち子ども会ん熱心さに タマガッチョツタ。杉田信男先生は 児童合唱団《ラジオ》指揮者 作曲もなさっていたんで。

投げた苗が宙に飛んじ

ラジオ放送ん電波に乗った 野津原ん田植え風景が 昭和27年
かるゆうありよった。こん年《1952》ん夏に 『投げた苗が宙
を舞っち程いい所に落ちた 野津原村じゃ田植えが…』 はじまっ
たんで 牛馬が適当に カキナラシタ田んぼを ヒラトウならしち
いつでん植えらるる。

畦に配った苗が早う植えち くれんかなあち待っちよるき 元気
んいい 男しが苗を掴むとピッと 投げた。広い田んぼじゃ植ゆる
前に 等間隔に配っちよくと 植ゆる途中じ苗取りに 移動せんじ
いい。移動すると足跡んくぼみに 植えつけん床に土を 寄せにゃ
苗が浮き上がるき ヨダンナ手を取る。

『植えつけた田んぼにゃ もう蛙が我が物顔に泳ぐ 親うね取っ
た4つん間隔に上手に 早う植えながら下がっち 行くそん手裁き
ん鮮やか 隣んしを横目じ見ながら ジャブ ジャブ 足ん動きに
水音がまるで リズム奏ぜち田の中は田植え行進曲。次々に植えち
済んだ家じゃ 道具を洗い残した苗を 神棚に供える』

『里ん加勢に行くんか 車に雨具を積みこむ若い夫婦 気持ちは
もう母親ん手料理ん 楽しみに走っちよるよう。年寄りしも長い間
ん水ん中ん仕事じ ダツタンジャロウ 一杯飲む酒も案外早う酔い
が 回ったんじゃろう 縁先じイビキうかきよる』 今日雨はな
かったが これからは水が絶対ほしいもん もう降ってんいいで。

放送のバックにゃ Hammondオルガン演奏 素朴な原稿でん風景が
浮き彫り さるるごつ農村の田植えが 目に浮かんじくる。地獄た
あよう言うたもんじ 田植えがすみゃもう ゆっくり入湯でんいけ
るき 世話になったシタチト 湯の平にでん行くかなあ。『泥落と
しになえ』 地獄入りかる抜けた 今年も豊作願うち。

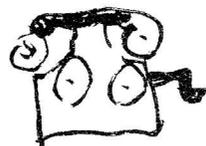
『五助さん サナボリ餅で』『や もう済んだんか 早えのう』
『遅いなあ誰でんしきるき』『じゃのう 言うこた一人前じゃの』
『口かる生まれたきな』『こりゃもう 俺が言うんぬ お前言うち
ちしまうな』『こらえよな ハイ御神酒も』『これこれ 忘れたち
思うたがやっぱ ヤンな気が利くのう もう嫁ごに行ってん いい
ど』『知らんで サイナラ』

にんまりすると 五助さん やっぱ嬉しいんじゃなあ 神棚に供
えち柏手ポン。響きがいい 今日も天気もいいし。翌年28年にゃ
大事雨が降っち洪水が。大分県だけでん被害100億 死者54人
不明25人が出た。田んぼん畦に止めちゃつた 荷馬車も流される
はずじ 苗がのうなった農家も。いいあんばいに九州各地かるん
救援苗が送られち来たき 遅れた田植えもなんとか 出来た。そん
中にゃ佐賀県かるも来たし そん人がたまたま同性同名じ ご好誼
も続いたようじゃつた。こん年かる『ラジオ大分』開局。

放送ち言ゃ『有線放送電話』も 35年《1960》スタートす
る。何戸かが連なった集団電話じ 利用が多い時間は手間どるが
親戚^利かる『ナンバン ナンバン』ち呼べば その家が受話器を取り
通話が出来た。不便さが少しはあるが 集団に連絡するのが目的ん
一つでんあったき 定時に農事関係ん情報とか 新しいアドバイス
病虫害予防、緊急連絡などにも使うき 至便でんあったる。

これも46年にゃ『集団加入電話』になり 電電公社になっちか
るは《49年》 個別電話にと移行した。ハンドル回しち局を呼び
相手ん 番号継げちつないだ時代かる やんがちダイヤル方式に。
そしちボタン式と様代わりしつつ 今や携帯電話の天下になった。
進んで便利になったが それが果たしていいんか それぞれん思い
もありそうじゃが。

五助さんもうつらうつらシヨッタガ あんまり
世の中早走りすると 俺ん出番がノウナリソウチ 心配しよるが。



あんまり気持ちよさそうに 眠つちよるきコンナカメそん頃ん
米ん 値段をチョイト見ろうかなあ。昭和27年…3000円

35年…4117円

27年⇒吉田内閣。35年⇒池田内閣。46年…8031円

46年⇒佐藤内閣。49年⇒田中内閣。49年…13702円

46年頃にゃ減反政策もあっち 農家ん窮状は厳しゅなったが
都会に集まる企業の発展が そりゅうカバーしたもんじゃき 町
はいいが反面 農村の若者流出と過疎化が 進んじ来るごつなっ
た。

『五助さん ぼちぼち起けんと 荷を取り行くんじゃねえの』
タマガッチ目をさめーたら もう陽がデーぶん西に カタビイチ
ヨル。『アリヤーまゝ ちっと遅うなったが まゝいいか』ち
釣瓶水じ顔うノンボリクンダリ 洗うと腰ん手拭いわ 打ちぶっ
ち拭きあげた。まゝ男前じゃきモテソウじゃ。

『おみっちゃんに イイツクルで』『ダマッチョキヨエ』顔
がちっと赤うなったんな やっぱ悪いち思うたんか。『サトガラ
う取っち帰っちゃろうか』『ふんと おおきに もう言わんき
な』『ふんともう アゲタリ サゲタリじゃのう』『カンカラ
があったら ちっと取っち帰って 餅う炊いちよくわな』『じ
ゃのう ほんなガイト取っち帰るき』

気がいいもんじゃき 皆んなかる好かれもするし 冷やかされ
もしてん腹も立てんじ 併せち付き合いするんも 苦勞人じゃき
じゃろう。『こん前どま 間違えられち 何でんねえこつう ウ
ウセカケラレタ』怒っちゃりゃよかったにち 仕掛くるとやっ
ぱそりゃ出来んごたる。そこが又いい所でんある。

馬ん嘶き声に
笑顔ん五助さんな 荷取りに行くごたる。やっぱ男じゃのう

三助さんの碑石を引いて来る

世利川井路ん功績者 工藤三助さんがん顕彰碑が 湛水集落ん中程ん大井路んすぐ下にある。水音が木木を潜っち ここまじ響く場所にゃ素晴らしい大石が 建ち刻み文字が所狭しと 書かれち当時ん苦勞と才覚を 滲ませちよる。原石は横道ん方かる皆んなじ 引っ張って運んだち 地域ん人たちん話。

ともあれあれだけん大きさを ゆうまゝ運んだち驚嘆するが 人間の誠意と努力は突然 大きな力にも結集するもん。感謝ん念が集まる時そこにゃ 偉大な動きも達成出来るもんじゃろう。心から滲みでる人の誠は 予想以上ん結果も作りだすもん。そこに人間の能力じゃ予想もつかん 偉業が達成もさるる。

おそらく道も悪いし道中も長いき コロを利用したんか スベリ木を巧みに利用する そげなあらゆる策略を駆使した 壮挙じあったんじゃろう。運ぶ事が出来たんなら そんな業師は立てる事は 難儀じゃなかったんじゃろう。現地じ彫刻しち結集する 人の真心は岩おも通すんごつ 見事に作りあげたち思う。

野津原まじ水を送りてゑ そんな一心がここまじ人を そんな気にさせ動員した力を有効に生かす時 夢はきつと叶うもんじゃろう。風雪に耐えち不安な時にゃ さらに防備もしてか 現在ん姿お維持したそんな取り組みは 理屈じゃ説明できんかん知れない。旅道中んしたちが眺め 読み伝えながら幾星霜 真心に対する人ん周年の 形は今も厳然としてここにある。

勝海舟や坂本竜馬も見上げ 歴史に触れちこれを眺め 時代ん記録にとどめち自分の 貴重な宝物にもしたんじゃ あるめ一か。作り出す事は簡単でも 心ん結集する遺跡は 価値観も大きいち思われる。水が流れちここまじ届く 人ん情けん橋渡りつつ。



工藤三助さんな谷村ん人じ 元禄11年《1698》直入郡の
朽綱かる 大龍井路を成功させち 水を庄内に連れち来たんで。
そしち元禄16年《1703》にゃ 谷村やら野津原村にも水を
連れち 今まじ畑が多かった地域じ 田んぼが増えたもんじゃき
生活がそりゃゆうなったち 喜んじよる。

じゃがそん工事ん苦労は とてん並み大抵じゃのうじ 特に途
中であつた固い岩どま 掘り取るに一日削ってん 弁当箱一杯し
か取れんぐれな難工事じゅやつたそうな。見た訳じゃねえけど
そん 工事現場ん『浮動岩』どま フンフンち頷くぐれーに見え
た。が世の中ユウシタモンじ 夢枕に出た不動明王ん お授けん
知恵を実行したら 何と何とサラサラと崩れた。よそん領地を
幾つも通るき そん手続きにゃ調査にゃ もうオオゴトじゃつた
らしい。

大龍、堤子、世利川、こん3つん井路ん開通は 今まじ畑作物
だけに苦労した夢も 田んぼん稲になつたき 経済もゆうなっち
そん ご恩な終生忘れられんごたる。そげな思いも込めち 湛水
に水が顔っ見せた記念に 建てられたんが三助功績碑。嘉永6年
4月に《1853》美しい水音ん聞かれる ここじえーと苦労が
実つたち 喜んじよることじゃろう。

『五助さんより先輩じゃきな 三助さんな』『じゃの俺よりも
アンヤンジャノ こんつぎんシャ六助か七助じゃな』『やっそう
か ウンそんとおりにゃ』 二人あ顔見合わせち大笑い。横瀬ま
じも流れち行きよるが お陰じ米作りなら畑に比べち がいとそ
ん苦労が減ち 収入は反対に増えたき 三助様様じゃな。

水はカサかる低い所に流るるが 当たり前ち思うと大間違いで
そん 水かこき一流れち来たきこす 目にゃ見えんが長い間にゃ
どんくれ 助かり楽になつたかじゃろうな。

方言説明

- 9 1 P おりゃせん…いませぬね。シコ…準備。デエブン…だいぶ。じゃつた…でした。ムゲナカッタ…可愛いそうだった。
- 9 2 P まじにゃ…までには。そりゃ…それは。じゃろうな…でしょうね。ダッチしもうた…疲れてしまった。ポクト…急に
- 9 3 P カキナラシタ…農具でひらたに平均にして。ヒラトウ…平らに。ダッタンジャロウ…疲れたのだろう。シタシト…した人たちと。
- 9 4 P サナボリ…田植えが済んだ行事。じゃのう…でしょうね。ヤン…あなた。サイナラ…さようなら。ナンバン…相手に呼びかける。ハンドル…手で回して合図する。シヨツガ…していたが。ノウナリソウナ…なくなりそうてい。
- 9 5 P コンナカメ…この間に。カタビーチ…傾いて。ノンボリクンダリ…上り下りの、上や下に。イイツノル…言いだした執拗に。サトガラ…いたどり。カンカラ…さんきらい。ウウセカケラレタ…相手の事に誤解された。やっぱ…やはり。
- 9 6 P コロ…まるいものを利用して転がして移動させる。スベリギ…すべる物を利用して移動させる。
- 9 7 P もんじゃき…ものですから。じゃが…ですが。とてん…とても。ユウシタもんじ…よくしたもので。よそん領地…他国の領地で勝手に使えない。えーて…やっと。アンヤンジャノー…兄さんですね。ウン…確かに。カサ…上手の方。

五助さんがん万年暦にゃ 面白おかしい話がなんか 人ん道か
はずれんごつシヨヤ ち言うごたる語り調子じ 話しちくるるき
又キテネになっちしまう。今年もこころじ千秋楽になるけんど ゆ
う考えちみりゃ もう25年間も方言調査を 継続しちよります。
それは 愛読者皆さんの支援があつてん事 愛読者の皆さんが作っ
ちよるような そんな思いで継続しています。ご自愛の程を。



あとがき

今から3年前の平成23年にゃ 地震、津波、原子力発電所の事故など 東日本では大きな災害 世界中からの支援があり 国内でも義援金の支援が 集まって幸いに復興も 進みました。その前からも猛暑、厳寒、と異常気象も続いて 予期せぬ地球全体が 窮地に傾きつつありそうな そんな予感もしました。

発足から25年あまり ご愛読の皆様を支えられて 今回も続No.18号が出来ました。方言単語も13088語になり 勿論その中には方言ではない 単語もあるかも、使われない単語も、でも方言集の性格上 使いましたので ご了承ください。単語は今『け』の項目の『モ』まで進み 死後になりそうな物も 入っています。が是非使って暖かな心に 触れてください。

この他に 表往還五助旅日記は 下詰 上詰、まで辿りつきました。ヒキマメシ…などの故郷の味。冷汗かいた殿様…子どもの方言物語。民話、伝承。女性の底力。連鎖劇…などの玉手箱。ちよつと一服。あげな、こげな話。などが巧みに単語を ちりばめて面白おかしく 並べさげてあります。

会員は家庭の仕事の余暇を 利用して愛読してくださる 皆様の笑顔を思い浮かべながら 全て手造で取材編集 構成タイプ打ち監修、印刷、製本と素人づくりで 限定100冊を お届けしています。故郷の歴史を少しでも 輝く太陽に当てて先人の苦勞を そっと紹介したい。何よりの願いです。

支えて下さる皆様のご愛情に甘えて継続して 少しでも歴史を表面に出したいと 取り組んでいます。健康管理に心くばりされまして ご自愛の上お過しを ご祈念申しています。お元氣でお過しを。ご愛読ありがとうございました お礼まで。

伝言板

平成26年版続編No.19号《通算29》 予告

いつもご愛読頂きまして ありがとうございます。
No.19号にも『あげな、こげな話』を じめ例年の
ように 故郷の味。民話、伝承。方言子どもの世界。
。ちよいと一服。玉手箱。女性の底力。

それに今回から⇒『あんぽなつかし』テーマに 昔
と言っても 80年位前から 順次今日迄を 辿っての歴史や
当時の 社会環境 文化などを取り入れた 『ミニ社会』を
紐解きます。お楽しみに くれぐれも お元気な日々を 心よ
りお祈り申しています。19号の予告です。



野津原方言調査会 大分市大字竹矢 矢の原

☎ 097-588-0572

事務局 大分市大字野津原本町

☎ 097-588-0092

会長 小野寿祐

佐藤源治 那須政子 赤星ヨシミ

続編No.19号《通算29》 発行予定⇒平成26年10月上旬